



創立120周年

東京歯科大学広報



血脇イズムと近代日本の教育制度

学長 金子 譲

はじめに

建学の精神とされている「歯科医師である前に人間であれ」、そして人本主義と家族主義などが、血脇イズムとして伝えられているところである。「人間であれ」というのは、職業人である前に社会人としての教養を備え、いやしかなる生き方をすることが大切だよ、といわれているのだと思う。血脇イズムとは、血脇守之助の理念に基づいた先生の常なる主張、そして先生の考えや行動指針を指しているのであろうから、先生の人物像に他ならない。今に残されている血脇イズムは、いずれも現代においても普遍的なことである。がしかし、血脇守之助の人物像とその時代を背景にして血脇イズムのそれぞれをリンクさせて考えてみると、スケールの大きい迫力のある骨太な血脇守之助の主張が浮かび上がってくる。血脇守之助は、歯科医師の身分確立、歯科医療の社会的認知、歯科医師育成機関の大学化に向かって生涯を賭けた人物である。その軌跡から血脇イズムは歯科確立活動における戦略的なジグソーパズルの一駒一駒としてみる事ができる。したがって、それらは目標を達成させるためのツールであって本質的な血脇の精神はその根っこにあると私には感じられる。そこで、近代日本の教育制度を背景にしながら私が感じている血脇イズムの本質を解き明かしてみたい。

2009年 10・11月

本号の主な内容

239号

- ・血脇イズムと近代日本の教育制度
- ・第41回東歯祭開催

- ・訃報 黒柳錦也名誉教授ご逝去
- ・教職員への移転関係報告(4)

教育制度整備と高山歯科医学院

明治維新に始まった日本の近代教育制度にあって、現在は第2の教育変革期にある。連綿と構築されてきたわが国の教育制度が、太平洋戦争の敗戦によって米国式となったことを第1として、さらに1990年代からの政府の規制緩和と政策にともなった教育改革が第2とされている。今日特に大学・大学院が主体となっている高等教育においては、その周辺環境の変動が激しいことから、大学運営での理念が揺るぎがちである。

明治政府は1872年(明治5)に「学制」を制定し、教育の機会均等をめざす近代的な考え方で初等、中等、高等の学校制度を一挙に展開したが、制度としての不備は大きかった(文部科学省「日本の成長と教育」(昭和37年度))。これら初期の混乱に終止符をうち近代日本の学校教育体系を整えたのは、初代内閣総理大臣伊藤博文に任命された文部大臣森 有礼であり、それは明治も中期になった1886年(明治19)に発令された帝国大学令、中学校令、小学校令、師範学校令によったとされている。教育の普及とともにエリート教育と大衆教育を分けることが意図された。

幕末の有名洋学塾のうち明治まで生き延びることができたのは福沢諭吉の慶應義塾だけであって、1870年代にいち早く学校を設立したのはキリスト教や仏教などの宗教団体であり、後の立教大学、青山学院大学、同志社大学、明治学院大学、フェリス女学院大学、駒沢大学などの私立学校が多数設立された。また1880年代には日本で最初の近代法である刑法が公布されたこともあって、私立の法律学校が続出するようになった。後の専修大学、法政大学、明治大学、早稲田大学、日本大学その他現在の有名大学であり、最近では多くがその創立記念事業を展開しているが、これらの学校も各種学校あるいは未制度の専門学校にあって大衆教育を担いながら、私立学校としての力をつけていった(草原克豪)。

高山歯科医学院が設立されたのはこのような時代である。高山歯科医学院は、「高尚ノ歯科医学ヲ教授シ治術ヲ練修セシムル所トス」を目的として、前年11月に東京府知事に開校申請書を提出し、12月に認可され、1890年(明治23)1月に開校した。それは上述の多数の私立学校と同様に各種学校あるいは未制度の専門学校という位置づけであった(表1)。高山歯科医学院は、1学年には理科系の一般教養科目を入れ、2学年では内科、外科の総論、各論を加えて高等中学医学部をモデルにした4年制の密度の濃いカリキュラムとした(水川秀海)。しかし、定員200名とした学生は初年度9名に過ぎなく、高山紀齋の考えた制度は明治中期の日本人には受け入れられなかった。その理由は、1. 入学資格を尋常中学以上の学力としたが、当時は中等教育整備が不十分でその卒業生が少なかった。2. 学費が高く、学校による教育よりも試験による資格試験獲得を目指した。3. 私立の高山歯科医学院には兵役免除がなかった(水川秀海)。そこで高山は「歯科医術開業試験」に対する予備校的教育の色合いを強くして学院経営を何とか継続した。

表1 明治23年までに設立の公私立専門学校
(明治35年当時の状況)

学校名	所在地	設立年	学科	在学者数
東京慈恵医院医学校	東京	明治14年	医学	210
* 済生学会	東京	明治9年	医学	620
* 東京歯科医学院	東京	明治23年	歯科	92
* 東京薬学校	東京	明治21年	薬科学	348
明治法律学校	東京	明治14年	法律・経済	1,784
東京法学院	東京	明治18年	法律・経済	1,260
和仏法律学校	東京	明治22年	法律・経済	1,124
専修学校	東京	明治13年	理財学	790
日本法律学校	東京	明治23年	法律・経済	1,533
早稲田大学	東京	明治15年	法・政経・文学	2,364
慶應義塾大学	東京	明治23年	政治・理財・法律	320
国学院	東京	明治23年	文学	180
哲学校	東京	明治20年	文学	268
* 物理学校	東京	明治14年	理学	421
* 同志社薬理理科学学校	京都	明治23年	理学	2
同志社神学校	京都	明治8年	神学	16
* 大阪薬学校	大阪	明治23年	薬学	170
関西法律学校	大阪	明治19年	法律	684
* 神宮皇學館	三重	明治16年	皇學	106
京都府立医学校	京都	明治12年	医学	340
大阪府立医学校	大阪	明治13年	医学	409
愛知県立医学校	愛知	明治10年	医学	678

(「文部省年報」明治35年度による)

*印は明治35年度に「専門学校令」による認可を得られなかった学校。

「専門学校令」と「公立私立歯科医学校指定規則」

1) 私立学校と専門学校令

多数の私立学校は、認可、設置され質的な充実が増えてきても準拠すべき法令の無い学校群であり、「学制」と「教育令」にその名称があったにもかかわらず専門学校に対しては法規が用意されていない。これを整備したのが、1903年(明治36)菊池大麗文部大臣によった「専門学校令」である。専門学校は「高等ノ學術技芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス」として、その認可を文部大臣から受けるに必要な諸条件を「公立私立専門学校規程」として同時に公布した。ここで重視されたのが、1. 入学者の資格、2. 教員の資格、3. 施設設備の3つであった(天野郁夫: 大学の誕生 上)。このとき歯科医学校として存在していたのは、東京歯科医学院(現東京歯科大学)、愛知歯科医学校(1894年(明治27)設立)、京都歯科医学校(1905年(明治38)設立)であった。

認可された私立学校はすべて専門学校となり、国は帝国大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)の官僚育成コースとは格を分けた。この政令によって前記以外でもその後設立された多くの学校が本制度によった専門学校になるのだが、さらに大学への昇格を強く望んでいた学校は少なくなかった。すでに慶應義塾や早稲田は、制度上は専門学校であったが自らは大学を名乗っていた。私立学校の大学化を阻んでいたのは、官立の優位性を保ちたかった国と自分たちの独占を守りたかった帝国大学側であった。

帝大対私立学校の抗争はすでに双方の学校や卒業生が増すに連れて専門学校令発令前から生じていたことであった。1896年末(明治29)には、無試験任用の特権を失った帝大側がその復権を求めたことに端を発して、私立学校側が連合をつくり時の文部大臣に「建議請願」をするまでに至っている。この連合は慶應義塾を除いて当時の在京有力私学11校が参加していて、わが高山歯科医学院も名を連ねている(天野郁夫: 大学の誕生 上)。この出来事は、私立諸学校が学術・研究はともかく教育と人材育成の世界で官学と競合し肩をならべるところまで成長し、官公立学校に対して一段低く位置づけられ、従属的な地位に置かれていたことからの脱却を自己主張し始めた事実を示していると天野は述べている。また、わが国の高等教育システムのダイナミックスは、「大学: 専門学校」だけでなく「官学: 私学」という関係からの見方が必要であることをこの出来事は示していた(天野郁夫: 大学の誕生 上)。

2) 遅れた歯科医師育成システムと「公立私立歯科医学校指定規則」

歯科医師の育成教育はもっとも国の整備が遅れた部門で、その理由として歯科医師免許制度の曖昧さにあったことが指摘されている。1875年(明治8)に誕生した歯科医師第1号といわれている小幡英之助は「医術開業試験」をそれまでの「口中科」ではなく、自ら申し出て「歯科」として受験し合格した。小幡は医籍(4号)で「歯科専門医」の免状を下付された。そして1879年(明治12)公布された「医師試験規則」では医術の科目において「口中科」が消えて「歯科」となった。1884年(明治17)に「歯科医術開業試験」が始まり、このとき初めて歯科医籍として歯科医師が誕生した(第1号 青山千代次)。1885年(明治18)には医科・歯科とも開業試験を受けないと新規開業はできないこととなったことから、学術試験のための予備校的な講習会が盛んになったが本格的な学校をイメージできる教育施設は高山歯科医学院の出現まで待つことになる。

歯科医師の資格を得るために歯科医学校卒業者が加えられたのは、1906年(明治39)であった。この年に公布された歯科医師法で以下の要件が明記された。1. 文部大臣の指定した歯科医学校の卒業生、2. 歯科医師試験に合格したもの、そして3. 外国での卒業、免許に関する事項のいずれかとされたからである。「2. 歯科医師試験に合格したもの」は従前からの条件である。このため歯科医学校設置条件が必要となり「公立私立歯科医学校指定規則」が制定された。この指定規則は「歯科医術開業

試験」の開始後20年余も経ってからであり、これが歯科医学教育の遅滞を招いていたのだが、同時にその後の歯科医学教育機関設立の契機ともなった。しかし、1906年(明治39)には文部大臣指定の歯科医学校はどこにも存在しなかったため、貴族院での審議中に石黒忠恵氏の質問があり、これに対して文部省専門学務局長福原録二郎氏が、東京歯科医学院をそれに近い学校として挙げている。

「歯科医師法」の制定が契機となって共立歯科医学校(後の日本歯科大学)が翌年の1907年(明治40)設立された。その後、東京女子歯科医学校(1910年(明治43))、大阪歯科医学校(1911年(明治44)、大阪歯科大学前身)九州歯科医学校(1914年(大正3)、九州歯科大学前身)東洋歯科医学校(1916年(大正5)、日本大学歯学部前身)が設立された。

「公立私立歯科医学校指定規則」は、「専門学校令」による歯科医学専門学校設立の条件を具的に示した。すなわち、1.生徒定員に対し相当なる教室、図書室、標本室、薬品室、機械室、実習室その他の設備を整えること、2.入学資格は中学校もしくは高等女学校卒業かまたは同等以上、3.修業年限は3年以上、4.開校以後2年以上を経過していること、5.実習用患者数の確保という厳しい条件であった。このため「公立私立歯科医学校指定規則」に従って設立された歯科医学校は共立歯科医学校はじめ皆無であった。共立歯科医学校が文部大臣ではなく東京府認可による各種学校で出発したように、各校はまず各種学校で認可を受けその後それぞれ専門学校を目指した(表2)(水川秀海)。

正規の歯科医師数は1907年(明治40)の時点でも全国で900名程度しかおらず、歯科開業医試験の厳しさがあったとはいへ養成システムの遅れが窺われる(表3)。

(天野郁夫:大学の誕生 下)また、開業医試験制度は、戦前期を通じて存続し、歯科医師の過半数を専門学校卒業生が占めるようになるのは1932年(昭和7)以降のことであり、東京歯科医学専門学校も昭和3年まで開業試験受験者のための東京歯科医学校を付設していた。

3)東京歯科医学専門学校の誕生

「公立私立歯科医学校指定規則」が制定された時期、血脇守之助率いる東京歯科医学院は、その3年前に発令された専門学校への昇格の準備をしていて、その願いを1907年(明治40)6月付けで提出し、同時に生徒の徴兵猶予依頼も出した。そして同年9月12日に専門学校設置が文部省によって認可され、徴兵猶予はその1ヶ月後に認められた。それまで官公立学校に限られていた無試験免許の特典が、1905年(明治38)医師、1906年(明治39)歯科医師、1910年(明治43)薬剤師と私立学校にも拡大されていたので1911年(明治44)第1回東京歯科医学専門学校卒業生は無試験開業の特典を受けた。

1890年(明治23)までに設立された専門学校で1902年(明治35)当時の学校一覧(表1)がある。野口英世が学んだ済生学舎は、1876年(明治9)設立で医師国家試験を目指す者を1887年(明治20)から4年の間に1,500人も合格させた最大受験予備校であったが、専門学校への移行が果たせず閉校した。明治39年の医師法の制定が受験予備校的な医学校に、専門学校になるか閉校するかの二者択一を迫った。

さらに1911年(明治44)には1899年(明治32)制定の「私立学校令」が改正され、ここに財団法人設立が専門学校認可の条件とされたことから、私立学校の専門学校設立は財務的にも厳しい条件となった。現在の東京女子医科大学は吉岡弥生氏の東京女子医学校時代、吉岡夫妻の私財15万円の寄付に

表2 歯科医学専門学校設立時期

	(専門学校令による設立(認可)年)
・東京歯科医学専門学校(東京歯科大学)	明治40年(1907)
・日本歯科医学専門学校(日本歯科大学生命歯学部)	明治42年(1909)
・東洋歯科医学専門学校(日本大学歯学部)	明治43年(1916)
・大阪歯科医学専門学校(大阪歯科大学)	明治44年(1917)

表3 帝国大学・専門学校卒業生数(明治38年・大正4年)

	明治38年					大正4年				
	官公立		専門学校			官公立		専門学校		
	官公立	私立	小計	合計	官公立	私立	小計	合計		
医学	125	612	1	613	738	260	878	369	1,247	1,507
薬学	4	52	—	52	56	20	136	56	192	212
歯学	—	—	—	—	—	—	—	253	253	253
医療系	129	664	1	665	794	280	1,014	678	1,692	1,972

(『文部省年報』各年度より作成)

天野郁夫 大学の誕生 下 p248から引用

よって財団法人化した。専門学校認可と文部大臣の医学校指定を得るのに3年の歳月を要したほど(天野郁夫:大学の誕生 下)専門学校に移行するために多くの障壁を乗り越えなければならなかった。

当時の専門学校数は1903年(明治36)には47校、1910年(明治43)では79校、さらに1916年(大正5)には90校ということである。付け加えれば専門学校令とともに実業学校令も出され農業、工業、商業などの分野で官立の実業専門学校が誕生した。

この時代、政府は官尊民卑の行政が顕著で官立学校の保護育成と共に帝国大学卒業生に対する特権を多数用意していた。今日においても私立大学は国立大学とのイコールフィッティングを助成政策に関して常に要望しているところで、その構図は昔と変わっていない。学歴エリートの権威を示すエピソードとして、現東京慈恵会医科大学の創設者である高木兼寛(海軍軍医総監)と東大医学部出身の陸軍軍医総監森鷗外(森 林太郎)との脚気をめぐる原因論争は有名であり、今にして思えば滑稽でさえある。

大学令と東京歯科医学専門学校の財団法人化

1)大学令による専門学校の大学昇格と歯科の除外

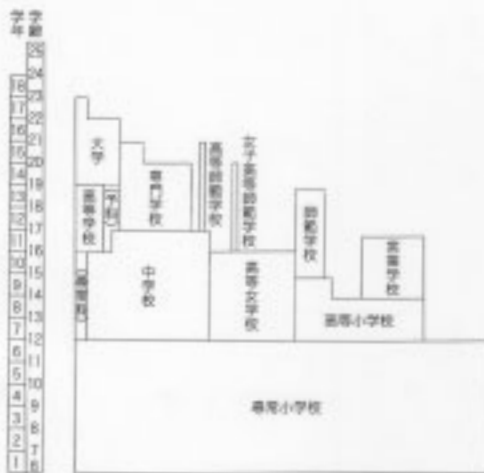
歯科医師数が次第に増え、歯科医師会などが整備されるにつれて他領域の専門学校と同様に歯科医学専門学校の大学昇格を守之助や奥村などは次の目標に据えていたことと思われる。

血脇守之助はすでに1897年(明治30)に官立歯科医学校設立運動を起し、他の35名とともに衆議院 林有造、貴族院 森山茂(高山紀齋岳父)の紹介で請願書を両院に提出した。優秀な歯科医師を養成するためには、完備した養成機関の設立が必要であるが、この明白なことが等閑にふせられているとの理由であった(日本医事衛生史)。請願書の事実上の請願者は自身が後に語っているように高山紀齋であり、高山は高山歯科医学院開校早々に官立移管を目指して、この請願運動が成功しなかったときには高山は血脇に学院の運営を移譲する決意だった。請願は国に受け入れられなく、血脇は中国大陸から帰国して高山から学校を引き継ぐ時点で国の援助がなくても「私立」として発展させていくことを決意したと、後の守之助の行動から考えられている(水川秀海)。

日清戦争1894年(明治27)～1895年(明治28)、日露戦争1904年(明治37)～1905年(明治38)を戦勝して国力が増大し、産業化が促進される中で社会は高度の専門的人材を必要としてきた。こうしたことから、大正に入って私立専門学校側はこれまで私立に認められていない大学昇格を求めて政府へ圧力を一層激しくしていった。1917年(大正6)寺内正毅内閣の岡田良平文部大臣は、内閣直属の臨時教育会議を設置し、帝大側、反帝大側ほか政府、そして経済界人など第三者を含めた約50人の委員で政府原案なしで白紙審議をさせた。本教育会議は、帝国大学以外の大学設置を提言し、それを受けて1918年(大正7)12月、「大学令」および「高等学校令」が制定された。これによって、長年の懸案であった私立専門学校の大学昇格は道が開けるようになり1920年(大正9)に慶應、早稲田、明治、法政などの私立8校が最初の私立大学となった。翌年に医科の単科である東京慈恵医院医学専門学校が大学昇格を果たした。

大学令には目的や学部(分科)などが以下のように書かれている。大学は、国家に必須(須要マ)な学術の理論および応用を教授し、その奥儀(蘊

図1 戦前の学校体系(大学令以降)



奥マ)を研究(攻マ)することを目的とし、併せて人格の陶冶および国家思想の涵養に留意しなければならない(第一条)。大学は複数の学部を置くのが通常であるが、特別な場合は、一学部でも一大学とする(第二条) 学部は、法学、医学、工学、文学、理学、農学、経済学および商学とする(第三条) というものであった(天野郁夫：大学の誕生 下)。つまり国は、歯科医学専門学校の大学昇格を認めなかった。歯科は研究の必要がなく教育に専念していれば良く、研究を診療に生かす専門領域としての発展を国は期待しないということである。医科は大学あるいは専門学校の2方式になったが、歯科は従来通りで歯科医師には大学卒は生まれにくいということになった。(図1)

2)なお大学昇格を目指して

1919年(大正8) 大学令発令の数ヶ月後に奥村鶴吉は「大学昇格を期し、積極策を立てて推進しないと、東京歯科医学専門学校の歯科界における先導性が失われる恐れがある」と主張したとされている。これに対して血脇守之助は、財政的理由から大学化に難色を示したと書かれている(東京歯科大学百年史)。血脇守之助や奥村が大学令で歯科が除外されたのを知らないはずはありえない。したがって、奥村の言は、大学昇格の夢は今回費えたが、将来は歯科に対しても他学部と同様に許可するだろうから、その時のために準備が必要だといっているのだと思われる。その準備とは、大学令に記載されている研究設備の充実、財団法人化、資産保有と健全経営、そして適切な教員数を揃えることである。しかし、その細部に関しては、今日の設置基準のように具体的に明示されているわけではなく、色々な学校が昇格していく中で次第に明らかになるという次第であった。

大学設置の認可要件は大変厳しく、国は特に資産基盤を重視した。このため1大学1学部につき50万円、学部を1つ増やすごとに10万円を加算して、国家へ供託することを命じた。これを容易にクリアしたのは慶應義塾だけで、その他の学校は大変な苦勞をして募金活動をしなければならなかったとされている。血脇は最も多くの情報を入手していたと考えられるので、準備をするにしてもこの高いハードルを越えるのは無理と考えたのであろう(水川秀海)。

守之助は、1919年(大正8)10月に母校拡張計画のための募金趣意書を作成した。ここには高山歯科医学院以来の今日に至る実績が簡潔に書かれるとともに、世界大戦後の社会変化が顕著となっている現状から、今後学校の拡張充実をしなければ多年苦心して展開してきた事業が水泡に帰す。このため、1.本校を財団法人にする。2.本校の建物ならびに設備を根本的に改善する、と二つの目的を挙げた。そして法人化のために守之助は自身の敷地と建物設備標本など計30万円余をすべて寄付すると趣意書に記した。しかして財団法人として本校を永遠に強固にする覚悟であるとした。また、将来教授および研究の両面に完全を期するためには現状では不足で建物設備の充実に約50万円の費用を要する。これは到底自分だけでは成しえないので広く基金募集をいたしたい。願わくは諸氏の同情を賜り、本校が過去30年間の絶え間なく努力してきた使命が将来にも全うできるように(東京歯科大学百年史)と結んだ。

上文では募金は財団法人化、教育研究の充実だとしてあるが直接大学昇格のためだとは明記されていない。守之助にしてみれば実質的な充実に多額が必要であるとともに、現状ではそれらが整っても大学令という国家的な厚い壁が立ちはだかっていることが大学昇格の文言を入れられなかった理由と思われる。しかし、後日大学昇格の条件として文部省に供託しなければならない50万円を募金額に追加した(歯科学報25:2, 1920)。いずれにせよ、守之助は私財を投げ打ってまでも学校の将来のため大きな決断をした。

この「財団法人化のための拡張基金募集(第1次)」は、その前年(1919年(大正8年))創立30周年祝賀準備委員会(7月20日)において同窓の村岡清治氏から「母校基本金募集」の発議があり、満場一致で母校に行くことになった建議(歯科学報24:7, 1919)に対する学校側の意思表示である。

1920年(大正9)3月財団法人は認可され、守之助は同年9月に資産(校地428坪ほか)を財団に寄付をした。

学生の反発と加熱する大学昇格運動

守之助のこうした計画に対して学生も呼応した。1919年(大正8)12月に学生の全校総代会が開催され、その後全学生召集のもと「大学創設期成」が議決され、「東京歯科大学創設期成会」が結成された。「期成」とは、物事の成功や完成を強く期すること(広辞苑)である。同月16日に「歯科大学創設問題演説会」が多方面に依頼した11名による講演会が同会によって神田青年館講堂で開催され、聴衆は2,000名だったとされている。

本会の記録が「歯科大学創設の叫び」(1920)として、後日、本校新法人の監事に就任した東京慈恵会医科大学の金杉英五郎教授らに面談した内容も含めて期成会から1920年(大正9)5月出版されている。貴重な資料である。会場となった神田青年館は明治、大正の労働運動、社会運動の活動拠点として今日に名を残していることから当時の熱気が伝わってくるようである。しかし、学校からは学業障碍のため運動の終結要望が内談され、1920年(大正9)3月1日の第4回学生大会で中止が決定された(歯科大学創設の叫び)。

この学生運動は、大学昇格のための学校充実の支援運動というよりは、大学昇格を不可能にした大学令に対する、つまり国に対する抗議の意味合いが強かったのではなかろうか。大正デモクラシー・言論の自由が叫ばれた時代とはいえ、お上の不条理を学生が糾弾することに学校側が危惧して期成会活動を休止させたと私は推測する。本会開会の辞で司会者は、「本会は言うまでもないがいささかも政治的色彩を帯びるものでない」と断っている。しかし、期成会創設の趣意書で、明快にその目的を以下のごとく記している。「憶ふに政府の発表せる新大学令は、我が歯科医学に関する学制の1項だけに存せざるは、実に我らの痛嘆せざるを得ざるところなり。故に我等は新大学令の制度に対し、大改善を叫ぶと共に、あまねく社会民衆に訴えて、歯科医学の権威を樹立し、民衆の力に依りて創造せられたる我が専門学校をして、更らに民衆の力に依りて本邦における歯科最高学府たる大学を創造せんことを決したり。」(歯科大学創設の叫び)

12月19日人形町で講演会の慰労会が行われた。出席した血脇校長は、三度四度席から立ち上がり真心のこもった教訓と感謝の言葉を述べた。学生は校長の喜びと思いを受けとった。校長は記念撮影を終えたとき「嬉しかった」と一言残して別れを告げたと、記録されている(東京歯科大学百年史)。血脇校長の複雑な思いが伝わってくる。

なお、日本歯科医学専門学校でも「日本歯科大学昇格期成学生大会」が1920年(大正9年)に開催されている(榊原悠紀田郎)。

新しい革袋に新しい酒を

1)長期欧米視察とある企て

財団法人として認可された東京歯科医学専門学校は理事会を結成し、理事長と校長を血脇守之助が兼任し、学監は奥村鶴吉、病院長は花澤 鼎が就任した。その4月には創立30周年記念祝賀会を盛大に開催した。血脇守之助はあけて1922年(大正11)1月には8ヶ月かけてヨーロッパから北米へと視察にでかけた。一行は欧州から5月にはニューヨーク港に着き、野口英世が1ヶ月付き切りで守之助を案内した。野口によって収集され守之助が持参した資料が、後日日本の第一の教育改革で大きな役割を果たしたといわれている(水川秀海)。

アメリカの医学校は20世紀初頭に雨後の筍のように存在していた。それは、ヨーロッパ移民の人々が確実な仕事として1、2年の教育で簡単に取れた医師の資格を求めたことによるのだが、同時にそのことは医師の質に大きな問題を抱えさせることになった。Abraham Flexner(1866~1959)は、カーネ

ギー財団のブリチエット理事長の支援で、1908年(明治41)に155校全ての医学校・医学部視察(米国カナダ)をして、その教育実態調査を1910年(明治43)「フレクスナー報告」として発表した。そしてこれを基にして多数校が閉鎖あるいは総合大学へと移管させられた。改革規模は1904年(明治37)には160校(定員28,000名)を1920年(大正9)85校(定員13,800人)と半減させ、さらに1935年(昭和10)には66校まで縮減して質の確保のために大改革を行った。

カーネギー財団は同様に歯科医学校・歯学部にも調査を伸ばし、William Gies(1872~1956)が5年をかけて調査し1926年(大正15)に「ギース報告」を発表した。

血脇の欧米視察には幾つかの目的があったが、大学・教育視察には絶好のタイミングであった。目的の一つは、東京歯科医学専門学校が財団となって今後展開される新校舎での教育に新しい酒を注ぐ必要があった。二つ目には日本連合歯科医師会の代表として日本の歯科を欧米に紹介し、人脈を作る役割が付け加えられた。そして三つ目に隠された目的があった(水川秀海)。

血脇は、訪米の最後の地であるロスアンゼルスで、三つ目の目的である価値ある取り決めを全米歯科医学校長会議(28校)で取り付けた。それは、わが国の歯科医学専門学校(東京歯科医学専門学校、日本歯科医学専門学校、大阪歯科医学専門学校)の卒業生には、米国歯学部の最終学年に編入させるということである。従ってわずか1年間の留学で米国の大学歯学部を卒業した資格が与えられる。血脇は、大学令によった歯科への負の部分によって補おうとした(水川秀海)。歯科医師の地位向上のために「人間であれ」と繰り返していた血脇は、わが国に大学卒の歯科医師がなんとしても必要と考えていたのではないか。現在の高等教育政策の柱の一つにグローバル化が謳われている。先進国大学との単位互換制度は我が国の一般大学ではすでに実績を積み重ねていて、さらに最近では医学部でも徐々に始まりだしたところであるが、血脇の行ったことは現代と重なり合う精神が感じられる。

「かくの如き変遷とくに最近10年間の著しい改革はその原因の1半をカーネギー財団の活躍に帰せねばならぬ。...その1事業として13年前に合衆国、カナダおよび欧州の各医学校の調査を開始しその規模設備学科課程その他の内情一切を忌憚なく天下に公表したのだから堪らない、所謂アヤフヤ学校は悉く解剖台上に枕を並べてその醜骸を暴露した。...これに引連れて歯科の方面も自ずから緊張してきたが恰もよし一昨年秋より昨年夏に互る約1年間、同財団は再び「デンタルカレッジ」の調査を開始し米国およびカナダの歯科医学校に対して厳正なる批判を加えた。その結果...」。1923年(大正12)の歯科学報(28:6)に掲載されている血脇守之助の報告記である。十分な準備によって大きな成果を挙げてその年の8月15日横浜港に無事到着した。同伴した遠藤至六郎は7月末にロスアンゼルスで守之助と別行動となりベルリン大学留学へと旅立った。米国医歯学教育において今日の原点とされている改革渦中に守之助が身を置いていたとは驚きであり、東京歯科医学専門学校の将来に展望を抱いて帰国したに違いない。

2)新校舎竣工と校歌完成

さて、学校の財団法人化とともに計画された鉄筋コンクリート3階建て新校舎は、同窓からの寄付のお陰もあり一行の欧米調査・視察出発直後の2月に竣工した。守之助は新校舎の大方の完成を見たであろうが、最終的な完成を待たずに長旅にでていることから、視察の重要性と守之助の当時の多忙さが垣間見れる。守之助は不在であったが大正11年4月からはその新付属病院で花澤新病院長のもと新診療システムと臨床教育が導入され、新しい一歩が踏み出された。

その数ヵ月後には学校、同窓会、学生会が共同で校歌の公募案内を歯科学報に掲載したりした。後に校歌作成は学校が1926年(大正15)1月に作詞を北原白秋氏に正式に依頼した。が、待つこと久しかったが1927年(昭和2)9月に白秋氏によって詩が完成し、直ちに作曲を山田耕作氏に依頼した。山田氏は1週間で曲を完成してくれた。校旗も同年5月に高島屋の手で立派な織物として出来上がった。学校は1927年(昭和2)11月に校歌・校旗の発表式をもった。東京歯科大学史のなかでもこの時期は、学

校・学生・同窓に強い一体感と困難に立ち向かう勢いが感じられる。

歌は時代を表すというが、白秋氏の校歌にもそれは如実である。「私学の苦節は、厳たり徹れり」の節である。また、白秋氏が語っているように内容は、血脇先生を主人公にした学生の成長と敬愛がよく表現されている(金子讓)。

守之助の氣質

血脇守之助は、定められた道を歩んできた人物ではない。商人の子供が商人に、医者の子が医者になり、といったように親の仕事を継いだ人物ではない。血脇守之助は、野口英世のように幼少からの夢を長年追いかけて天職を得たのではなく、むしろその対極にいる。血脇守之助は明治初頭(1870年(明治3))の生まれで、社会の変革期に精神を育てている。今日のように社会機構が出来上がった時代の人物ではないので、人物評価のためには時代背景を十分理解しなければならない。

血脇守之助は学齢期になると学校を転々とする。その数、9校である。今考えると落ちこぼれの一つかとも思ってしまう。しかし、後年多方面で活躍することになる知己がそうした学校での友達でもあったことから想像するに、その習得態度は真面目であったと思うし、類は友を呼ぶに相応しい優れた子供であったに違いない。中等教育制度さえも確立していない時代なので今で言えば英語習得のために役に立たない塾は変えていくというぐらいのこともかもしれない。12歳で我孫子から上京し慶應義塾童子寮に入寮以来、この英語を物にしたい意思是揺ぎ無く、結局9年は英語勉強に費やす。しかし、英語を道具にして何をしたかったのかは表からは見えにくい。新聞社に就職し、短期間で退職し、一旦我孫子に帰った後、新潟の中学校で英語教師になる。ここでは半年後に今後の進路について身近な医師に相談している。身をどうしたらよいのか、20歳の頃、明治中期、新しい時代の中でわが血脇守之助は青春の彷徨をしているようである。新しい仕事 Dentistry に就くのにはどうしたらよいのか。

東京に戻り、相談に向かった友人宅にいたのが高山紀齋の義弟であった。そして守之助は高山歯科医学院に入学した。23歳、1893年(明治26)の時で高山歯科医学院も開校したばかりである。当時歯科医師になる道は高山歯科医学院だけではなかったはずである。紀齋の義弟に出会ったのが運命的な偶然であったと思う。血脇守之助は高山紀齋のもとに行かなければ、その後の道は同じであったかどうか疑わしい。守之助の活躍は、教育の場にいたからこそ成し得たし、そのエネルギーの持続もモチベーションの萌出もそこにあると思われる。この義弟は、森山松之助、後に当時の近代ビルとして高名となった東京歯科医学専門学校の設計図を引いた方である。その父親は森山 茂、明治新政府の外交官である。1895年(明治28)朝鮮公使三浦梧楼は、李王朝第26代王妃閔氏(後の明成皇后)を王宮景福宮で日本の利にならぬとして暗殺をしたが、森山 茂はそれ以前に新政府の命を受けて李王朝との関係を作るために外交活動をしていた方である。これは、余談である。

「世の中は、五分の真味に二分俠気、あとの三分は茶目で暮らせよ」と守之助は野口英世の中国赴任に際して処世を教えている。守之助のリベラルさとこの俠気が、歯科医師の社会的地位向上のための行動の原動力ではなかったかと思われる。国の歯科に対する継子扱いや社会の偏見に対抗する感情の原点はここにあるのではないか。

一貫した研究振興

1922年(大正11)2月新校舎は竣工した。その5月には「歯科大学創設期成会」が再発足し、学校も6月に施設拡張のための第2次基金募集を発表する。学校は大学昇格を諦めていないことが分かる。大学令には、私立学校には相当数の専任教員を置くこと(第17条)そしてその教員の採用は文部大

臣の認可を受けなければならないとなっているので、学校での適切な教員育成は大学昇格に欠かせないソフトであったはずである。大学の使命は教育と研究であることは大学令に明記されているところで、この教員の資格として研究能力が要求されていたと考える。血脇守之助がこの点でどのように人材育成をしてきたかは、花澤 鼎の軌跡から窺える。(図2)

花澤 鼎は1902年(明治35)に東京歯科医学院を卒業し、そのまま学院に残る。その年に私立関西医学院と府立大阪医学院で組織学と病理学とを1年勉強している。1906年(明治39)に出来上がった木造の新校舎には狭いながらも病理組織研究室を本学院は設置している。花澤 鼎は1913年(大正2)ドイツ ストラスブルグ大学に31歳で象牙質の組織病理研究で留学した。第1次大戦が勃発し、約半年の滞在で苦勞の末帰国することになるが、血脇守之助は終始一貫して花澤 鼎の研究を支援する。



彼は1923年(大正12)、41歳のとき慶應義塾大学医学部から学位を取得するが、これが歯科医師としての医学博士第1号であった。第2号は1924年(大正13)慈恵会医科大学に論文提出をした奥村鶴吉であった。学位審査権は大学だけが有した権限で、したがって歯学部が存在しなかった当時、歯学博士は存在しなかった。花澤 鼎の研究室は東京歯科医学専門学校時代には隆盛を極め戦時中であっても研究は中断されることなく、我が校研究の牽引車となっていた。その業績は松宮誠一、そしてわが国最初の歯牙電子顕微鏡観察に成功した田熊庄三郎と引き継がれ、国際的な評価を得るに至っていた。

図2 右から血脇守之助 奥村鶴吉 花澤 鼎(昭和18年4月29日、奥村校長就任式、血脇名誉校長推戴式)

花澤 鼎の顕微鏡研究を支えたのは15歳で福島から出てきた近藤三郎であった。彼は花澤 鼎の学僕として私心を忘れて献身した。近藤三郎は私の学生時代には教授になっておられ、がっしりした短軀、度の強いめがねをかけて松宮教授のもとで仕事をされていた。陸上競技部の面倒をみてくれており、私の卒後もその面でお会いさせていただいていた。花澤 鼎と近藤三郎の関係は家族主義という守之助の言葉を私には強く感じさせる。

また、血脇は学内研究活性化のために1925年(大正14)「血脇賞」を創設した。つまり、血脇守之助は、古くから研究に意欲を示していたことを分らせてくれる。

関東大震災と守之助の決断

1) マグニチュード7.9と新築校舎の煙滅

さて、財団法人となって一個の人格を社会的に有するようになり、また外遊を無事努め、拡充した新校舎で新しい時代を作り出していたときに、守之助はじめ関係者を失意のどん底に落とす未曾有の天災が降りかかる。1923年(大正12)9月1日の関東大震災である。労苦の中で新築した校舎は1年半使用しただけでほとんどが倒壊し、残ったコンクリート3階建ては火災で中が焼失した。マグニチュードは7.9、神田神保町は特に震度が高かったとされている。災害を大きくしたのは火災で、期待された消火活動は、水道管の破裂と折からの強風で随所から発生した火災に追いつかなかったと分析されている。わずかに重要書類などは搬出され残ったが、学校の蓄積してきた30余年の貴重な資産は消失した。中には訪米で守之助が持ち帰ったアメリカ歯科医学教育に関する資料も大部分焼失した。後日奥村は再び野口英世に集めてもらった(高添一郎:野口英世と東京歯科大学、18-33)。

被災のとき守之助は53歳、奥村、花澤41歳と若く、その他、福島秀策、西村豊治、矢崎正方、遠藤至六郎、正木 正、斎藤 久等々教員も充実していた。守之助の学校継続の意思は固かった。この苦境を乗り越

えるために希望退職者を募り、留任者の俸給カットによって人件費をそれまでの半分に抑えた。1ヵ月後から再建に取り組んだ。学生の授業は、慶應義塾大学医学部を間借りし、10月20日から開始して約6ヶ月後には水道橋に戻ることができた。この慶應の行為に深甚なる謝意を学校は表している。法人は特別予算を組み、文部省からも私立学校に対する震災応急施設費が交付された。病院は11月10日に再開した。また、支援を内外に求めた。焼け跡に木造の2階建て校舎を2棟新築し、一応の落ち着きを見たのは1924年(大正13)3月であった。

2)暗雲たちこめる日本

首都を襲ったこの大震災の日本経済に与えた影響は甚大であった。第一次世界大戦(1914~1918年(大正3~7))の好景気から日本経済は一転して不況となり、大震災をきっかけに国内の景気はより悪化し、1927年(昭和2)3月に金融恐慌が発生した。これによって弱体化していた日本経済は、1929年(昭和4)のウォール街から始まった世界大恐慌の発生とほぼ同時期に行われた金解禁の影響に直撃され、アメリカに頼っていた生糸輸出が激減し日本経済は危機的状況に陥った。会社の倒産による失業者があふれ大学出も就職がままならなかった。疲弊した農村では娘の身売りや欠食児童が急増し悲しい社会問題が起きてきた。1932年(昭和7)には欧米に先駆けて景気回復を高橋是清蔵相の舵取りで遂げたが、その後日本は大陸進出を進めていき、軍部の発言力が強まり、満州事変(1931年(昭和6))を引き起こし、日中戦争(1937~1945年(昭和12~20))、第二次世界大戦(1939~1945年(昭和14~20))に突入していく。

経済恐慌の中での水道橋校舎新築計画

1)旧知の建築家森山松之助(図3)

1929年(昭和4)竣工した水道橋のビルは、驚くことにこのような日本経済が逼迫している最中に計画され、実行されたのだ。起工は1928年(昭和3)1月11日。設計監督は森山松之助、建築は二つの建築会社に依頼した。森山は、初めて守之助に会ったときは東京帝国大学工科大学造家学科の学生であった。1900年(明治33)東京高等工業学校の建築学講座担当を経て、1906年(明治39)に台湾に渡り、1921年(大正10)までの間、台湾総督府営繕課技師として多くの官庁建築を手がけた。台湾ではシロアリの猛威のため、森山は鉄筋コンクリートが有益とのことで、木造建築でも1階や基礎を鉄筋コンクリートとしたことから、彼はわが国の鉄筋のパイオニアとしても高名である(水川秀海)。1912年(明治45)には欧米各国視察のため出張している。1922年(大正11)に高山歯科医院の一角に森山松之助設計事務所を開設し、多くの民間建築等を設計した。東京歯科医学専門学校校舎病院の設計は自身の設計事務所開設間もない仕事であった。森山の恩師は辰野金吾(日本銀行、東京駅などの設計)日本で最初の建築学講座を持ち、帝国大学工科大学学長を務めた方である。辰野は、お雇い外国人として工科大学校に赴任しロンドン出身の建築家ジョサイア・コンドル(Josiah Conder)に師事した。したがって、森山の南欧風といわれたあのレンガ作りの建物は、聞かされていた米国人設計者ライト氏(旧帝国ホテル設計者)の流れとは別ものである。



図3 水道橋校舎設計者
森山松之助氏(1869~1949)出典:『栃木の建築文化・青木周蔵那須別邸-青木周蔵と松ヶ崎萬長-』岡田義治 1995 日本建築学会関東支部栃木支所(P143写真所蔵・森山慶之介氏)

地上4階、地下1階建て、総建坪2,209坪(7,200㎡)の威風堂々の外貌をもつビルが1929年(昭和4)10月30日に竣工した。出窓とともにガラス窓を要所に多用し、階ごとの横のラインでビルは引き締まった感じになっている(図4)。総工費は786,000円であった。

新校舎は伝統と明日へ向かっていく力強さと信頼感を印象づける。森山の以前の作風に同様な建造物はみあたらない。施主血脇と設計者

森山との見事な意思疎通である。なお、森山氏は1900年(明治33)の東京歯科医学院の開校にあたって理学・工学の教師として名を連ねている。

1923年(大正12)6月第2次基金募集として追加募集を決定しその活動を表明していたところでの大震災であった。守之助は、米国視察によって一層本校の内容外観を改善してこれを大学程度に進めなくてはならないとして、第1回基金66万円余と今回の30万円余を追加しあわせて100万円の募金をしたいと同窓への支援を依頼していた



図4 水道橋校舎(1929~1986)

(血脇守之助、池田成彬、富安 晋:東京歯科医学専門学校第二回基金募集計画趣旨 歯科学報)。1929年(昭和4)10月における募金の申し込み総額は1,305,035円、申し込み者は6,862名で、収入総額は815,600円となった(東京歯科大学百年史)。今回も同窓・校友の甚大な力によったが、1929年(昭和4)3月までの高山歯科医学院以来の卒業生累計は2,389名なので同窓関係のみならず多数の方々、この壮大な事業に賛同してくれたことが分かる。1920年(大正9)財団法人設立時に監事に就任の池田成彬(しげあき)氏は、1919年(大正8)から三井銀行筆頭常務の席にあった。後に大蔵大臣を務めた方だが、この時の資金支援に尽力大であったと伝えられている。池田氏は進文学舎、共立学校からの守之助の幼馴染である。

2)守之助の求心力と実行力

それにしてもどうしてこのような壮大が計画が立てられてのか。法人化に伴い寄付も含めて多額を投じて新棟を完成させたのが1922年(大正11)である。それらが1年半の使用後に災害で灰燼に帰したため木造2棟の新築、コンクリート館一棟の修理で一応の完了となったのが1924年(大正13)晩秋である。そして、1927年(昭和2)9月水道橋校舎設計なる、とされていてこの間2年半余しかない。設計作業には1年近くはかかっただろうから設計依頼をしたのは1926年(大正15)秋ごろ、したがって守之助が歯科の殿堂新築の決定をしたのは1925年(大正14)前後と推測されるので、何が守之助をしてこれだけ早期に壮大なビル建築の決定を不況下にもかかわらずさせたのか知りたいところである。

水道橋校舎完成と敗戦までの教育

1)守之助の心情と本質

1929年(昭和4)水道橋校舎は竣工した。神田一帯比類するべきビルがないほど重厚にして南欧風のモダンな昭和を代表する4階建て建築物が出来上がった。同年11月2日、盛大な竣工記念式典・祝賀会が文部・厚生両大臣はじめ各界の名士臨席のもと執り行われた。このときのお二人の言葉が、私立歯科医学院の苦難の道程を表している。79歳の高山紀齋は、守之助の手を握り「...政府の力でできないことを君はやりとげた。社会が進歩すればもはや官立の学校はいらない。自由な教育機関が成長していけばよい。それでこそ学問の権威ができる」(東京歯科大学百年史)と守之助に語りかけた。高揚した一日が終わり、その日の夕方には同窓会総会が開催された。席上守之助が吐露した真情が、守之助の本質を表していると思う。「おいでいただいた政治家、実業家、官僚にこの学校を見せたかった、この大事業が寄付でできたことを知らせたかった。この歯科の殿堂で彼らの認識を一変させたかった。」そして「...私の本性はデモクラシーである。百姓である。殿様、地頭に反感をもっている。封建時代なら佐倉宗五郎である。私は感激し、心底から感謝している。今ほど嬉しいことはない。」(東京歯科大学百年史)

守之助の原点はここにある。不平等、権威主義に対する反骨精神である。近々には大学令で大きな屈辱を受け、歯科医師会等の組織整備、国民医療としての歯科の扱い、明治開花の時代にあって西洋のきわめて進展した歯科医術の導入と人材育成、それに必要な歯科医師法制定時の苦勞、傍系としかみなされなかった私立学校への助成策等々、育成すべき立場の国家政策の貧困と新しい米国歯科医術の価値との間に大きな溝を自覚させられてきた。高山が呻吟したように、省みれば歯科のこれまでは民が先導してきた。国が歯科医師育成機関を設置したのは前年の1928年(昭和3)(東京高等歯科医学校)であった。1890年(明治23)高山歯科医学院創設以来40年後の国の対応であった。

夜遅くまで提燈行列が続き、水道橋は町をあげて祝ってくれた。守之助は、この象徴的な歯科の殿堂を完成させたことで自分の役割は終わったと述べている。

2) 名誉校長推戴と戦時体制下の教育

1943年(昭和18)4月29日、血脇守之助は東京歯科医学専門学校に推戴された(図2)。二代目校長は奥村鶴吉が就任した。守之助は新しい日本歯科医師会の設立で内閣辞令によってその年の1月に会長を任命された。守之助は校長辞任を、老年のため戦時下学徒修練の直接指揮がとれないこととしている。

1941年(昭和16)12月8日に開戦した太平洋戦争の戦局は、半年後のミッドウエー海戦でその後の帰趨は決定していた。1943年(昭和18)に入ると南方諸島での撤退、餓死・全滅など日本軍の壊滅が始まっていた。4月18日には真珠湾奇襲で英雄となっていた連合艦隊山本五十六司令長官が、ソロモン上空で米軍機の待ち伏せによって戦死した。

1943年(昭和18)10月には教育に関する「戦時非常措置方策」が閣議決定され、私学文科系の高等教育諸学校の規模縮小と理科系への転換、在学入隊者の卒業資格の特例なども定められた。また、早稲田大学、慶應義塾大学以外の私学はすべて専門学校にする動きが政府内にてできた。それは大学卒業年齢が医学部以外で22歳、専門学校は通常20歳であることからきていたが、この考えは私学が結束して阻止した(草原克豪)。その12月には文科系学生・生徒の徴兵猶予は停止となり、10月21日には関東地方の学徒出陣壮行会が明治神宮競技場で強い冷雨のなか行われ、学業半ばにして12月1日に第一陣が各地の戦場に出征した。その多くが富裕層、社会の支配層の男子であった大学生が「生等もとより生還を期せず」(江橋氏の答辞の一節)という言葉とともに戦場に向かった意味は大きく、日本国民全体に総力戦への覚悟を迫る象徴的出来事となった(Wikipedia 学徒出陣)。さらに翌1944年(昭和19)10月には徴兵適齢が20歳から19歳に引き下げられた。

1937年(昭和12)第1次近衛文麿内閣は、内閣に教育審議会を設置した。日本が不況を脱却し、戦前最も好景気を呈した時期であった。本審議会は1942年(昭和17)まで存続し、その間多数の改革案を答申した。この根底には、国民の期待に沿った開かれた教育制度を目指したことで、戦後の教育制度に結びつく民主的な改革の芽があったとされているが、1937年(昭和12)盧溝橋事件に始まった戦時下体制によって多くの改革はそのままになった(草原克豪)。なお、本校法人監事を昭和11年に辞任した池田成彬氏は1938年(昭和13)に近衛内閣の蔵相に就任した。

3) 市川土地取得と満州

1929年(昭和4)水道橋校舎竣工の後、法人は翌年から1937年(昭和12)まで水道橋校舎隣接地を初めとして5年間毎年土地を精力的に購入して市川グラウンドの拡大に努めている。この動きはしかし、その後はびたりと止まっている。敗戦後は進学課程、広大なグラウンド、そして市川病院の敷地がそのまま新時代を築けたことから、法人は戦時体制が深まる以前に大学昇格のための土地の準備を終えていたのかもしれない。

1932年(昭和7)から1945年(昭和20)までの間に、現在の中国東北部に満州国が存在していた。ロシアの南下政策に対抗するため日本の生命線として関東軍が積極的に関与して建国した。この地の

ハルピン医科大学付設歯科医学院の発足に際して、1939年(昭和14)末に福島秀策教授(1957年~1965年本学学長)が赴任し、1942年(昭和17)には厚生省に勤務していた高木圭二郎氏(1983年~1986年本学学長)が教授として招かれた。昨年8月友好協定を本学と締結した鄭州大学口腔医学院 姜国城名誉院長は満州国立ハルピン医科大学歯科医学院(1940年(昭和15)に国立移管)で福島教授、高木教授の学生(1942~1944.12)であり、締結は同氏の熱意の賜物であった。

血脇守之助の中国との関係は古く、1898~1899年(明治31~32)に清国に出張開業したときに始まり、1928年(昭和3)には高津 弑氏とともに朝鮮・満州の視察をしている。また、奥村鶴吉は1935年(昭和10)に満州国の歯科医師法制定、国家試験実施、そして歯科医育機関新設などに取り組んだ。

1941年(昭和16)には北京大学医学院に歯科部が新設され、主任として本校出身の小林一郎氏が任命されている。北京医科大学口腔医学院(北京大学口腔医学院の前身)の第2代の鄭麟蕃院長は本学1941年(昭和16)12月卒業の同窓である。なお、北京大学口腔医学院とも鄭州大学と同時期に熱田俊之助理事長と北京に出向き本学は姉妹校締結を完了している。

4)戦争末期の歯科医学教育

1944年(昭和19)日本本土への連合軍による空襲が頻繁になり、その6月には「学童疎開促進要綱」が閣議決定された。学校では9月に資材・備品・解剖標本などを山梨県などに疎開をさせた。1945年(昭和20)4月13日深夜には東京への2回目の大規模空襲で、学校周辺は焼け野原となったが校舎は奇跡的に焼失を遁れた。防火当番で当直の教職員や駆けつけた学生の消火で焼夷弾による延焼を防いだと語り継がれている。同年6月に学生の疎開が始まった。3、4年生は水道橋で診療を継続したが、1年生230名は秋田県仙北郡で、2年生200名弱は静岡県蕪山で8月15日の終戦玉音放送を聞いた。1945年(昭和20)入学した故井上 裕理事長は中学時代から日記を1日たりとも欠かさなかった方であるが、同年6月からその9月末日までがまったく欠落している。そして日記は10月1日「今日から授業開始」と書き始められている。

1944年(昭和19)4月には医学専門学校と歯科医学専門学校の教育要綱・学科課程が全面改正となった。7月にはサイパン島が玉砕し、10月には、レイテ沖海戦で連合艦隊はほぼ全滅し、日本はこの戦争に勝利することはもはや全くないことが決定づけられていた。しかし、神風特攻隊の体当たり攻撃が正式の作戦となり、国内では学徒動員体制の徹底・国民勤労体制の刷新・防空体制の強化を初めとして大学・高専での軍事教育全面強化がおこなわれていた。そして「本土決戦完遂基本要綱」が決定され竹やり訓練が開始された。このような状況の中での教育内容の変更である。歯科医学教育では、内科総論・外科総論を医学専門学校と全く同程度に果たし、3学年までに医学専門学校2年までの課程を全部修学させることが主要なことであった。つまり、歯科医学専門学校で医学専門学校学科の3分の2以上を履修させるようにして、医学的素養の習得に力を入れるカリキュラムとした(今田見信、正木正)。

1945年(昭和20)1月には本土決戦の「帝国陸海軍作戦計画大綱」が裁可され、その4月には歯科医師の医師試験受験が認められた(医師免許の特例公布)。歯科医学教授要綱の変更と上述の特例は歯科医師・歯科医学生を本土決戦に使うための対策であったのであろう。20世紀初頭からの日清・日露戦争にはじまった日本の富国強兵・南進・アジア政策は遂に欧米列強と戦うまでに進み、半世紀の後、完膚なきまで叩きのめされた。

1918年(大正7)大学令発令以来4半世紀にわたって制度改善に国の目が向けられることなく歯科の願いは叶うことがなかった。戦前の昭和は、歯科医学教育政策の空白期といえる。1941年(昭和16)から1946年(昭和21)までの本学卒業時期は12月であったり9月であったり不規則である。本学同窓会名簿を眺めていて、その生死を賭けた激動の時代になお明日を見つめていた諸先輩の存在に思いを馳せるのはそう困難ではない。

大学昇格と永眠

1)最初の歯科大学

東京歯科医学専門学校理事長血脇守之助は、1946年(昭和21)4月20日付で東京歯科大学設立を文部省に申請し、同年7月19日文部大臣田中耕太郎から認可された。わが国で最初の歯科大学であった。予科3年学部4年が修業年限であった。同年9月11日に120名の新入生が市川菅野の校舎で開校式に臨んだ。歯科学生としてわが国で最初の大学生である。1953(昭和28)3月に卒業し1期会と名づけられている。

敗戦は皮肉にも日本の文部行政が長年等閑してきた歯科医師育成機関の大学化をもたらした。守之助の悲願が適う機会が到来した。1945年(昭和20)12月14日の理事会において奥村鶴吉理事ほか理事会メンバーが大学昇格の推進論を展開していたなかで、守之助は時期早尚の立場を譲らなかったという。大学昇格のためには校舎、施設そして教員の充実を図らなくてはならず、焼け野原のこの混乱の中でそのための資金手当てはできるのかという危惧であった。理事の木下謙次郎氏のこの好機を逃したら戦前のままになるという意見によって大学昇格準備が議決された。守之助の逡巡は理事長の責任として理解できる。守之助はかつて財団法人に移行させるときにも同様の躊躇を見せている。しかし、周囲の意見に耳を貸し結局は意を決して同意している。慎重さと果敢さの使い分けが指導者の資質であろうが、大きな成果に繋がる決断をしてきたのは、最後に背中を押してくれる信頼できる仲間を持っていたことによったとも思われる。

「併せて...国家思想の涵養に留意しなければならない」と、かの大学令に記された国による思想統一に代表される私学に対する監督権は、戦後大幅に制約され、一転して民主化への教育改革が教育基本法(1947年(昭和22))、学校教育法(1947年(昭和22))や私立学校法(1950年(昭和25))によって進んでいった。学校教育法によって専門学校制度が廃止され大学は現在のごとく一元化され、新制大学は1949年度(昭和24)に発足した。

2)記念式典

大学は1946年(昭和21)11月2日大学創設記念式を挙行し、同3日4日にわたり祝賀祭を開催した。

「記念式の当日は天気快晴で、式場は真に立錫の余地もなく、時間も正確に始められた。私共は近頃の弱い体では血脇先生が式に来られるとは到底望み得られないと断念していたが、学生が承知しない若い教職員も承知しない。是非とも背負ってでも連れて来ると云い出した。とうとう時間少し前に自動車で来られた、だんだん延びて屋上での祝宴会にも臨まれ、記念撮影もされ、二時過ぎまで苦痛も疲労の色も見せずに、此が今生最後のそして終戦後初めての登校であった。その後数日はかえって普段よりも元気がよかったそうである。...その式の終わった帰り途に勝俣局長は、何処か知人の家に寄って「今日は本当に泣かされたよ」と云って涙を浮かべながらその式の話をして、血脇先生が一番終りに一同の直前に立って例の通りの調子で話をされた時は、自分も胸がつまって押えられなかったという話をされたそうである。その数日後我々が集った時に原一学君が、先生がいつもの通りに大きく手を緩やかに振りながら話をされるあの様子は、一生目の前にあって忘れる事が出来ないと云ったが、一同は心から同感の意を表して「そうだそうだ」と頷いたのである。」(奥村鶴吉)

「その年の11月2日に東京歯科大学創設記念式がホールで行われた。私はその時戦後始めて上京し、その盛儀に列することを得た。

ホールの壇上には机があって、壇の袖には大きな花瓶に黄色い菊の花が溢れる程盛られていた。壇の上には奥村学長の他、GHQのサムス大佐、リジレー中佐、文部次官、厚生次官などの居並ぶところ、名誉学長の血脇守之助先生が両腕を支えられて登壇した。禿頭、長方の温顔も痩せて、病軀を引くようにして真中の席につかれた。それは宛も朽ちなんとする巨木が僅に余薫を発しているかの如き容子であった。

躡て血脇先生が机の前に立たれた。誰かが蔭から先生の腰のあたりを支えていたようである。それ程先生は弱々しく見えた。

ところが唇を発する言葉にはそういう弱さが微塵もなかった。声高ではないが、聞慣れた例の、一寸もつれるようで、なつかしい慈父のようなやさしい声であった。明治33年に、創立後10年のこの学校を引受けてから五十年に当るわけである。夢にも描かれた歯科大学の創立に当って感謝あるのみと強調された。満堂の人は首を垂れた。

「この盛典を親父にも見せたかったと思う人は何人かあると思うが…。」

血脇先生は仰有った。私の父も大正の始めにこの学校を卒業し、瞑目の時は同窓会の支部長でもあった。血脇先生の言うのは、私を指しているかの如くにも思われた。先生のその一言を聞き、熱涙の滂沱として伝わるのを制することが出来なかった。

盛典のさなかに思わぬ亡父のことに触れて、急に混濁した私の頭の中に、再び先生の言葉が聞えて来た。

「この盛典を親父にも見せたかったと思う人は何人かあると思うが…。」

先生は同じことを繰返されたのである。

私はその3年半前に、講演中の壇上で聴講生から看護られながら、次第に意識を失って行ったという父の姿を改めて想い浮べ、父も亦この日を待望していたことを想い併せ、茫然となって仕舞い、その後のことは全く記憶にない。」(齊藤利世)

3) 永眠

1947年(昭和22)2月24日血脇守之助は永眠した。天命を全うした77歳の生涯であった。同年5月の血脇先生追悼号(臨床歯科学報2巻3号)でご長男の日出男氏は回想している。「父は家庭にあっては厳格で秋霜烈日の感があり、酒を飲む以外に笑顔を見せたことは殆ど無いほどでした。几帳面で物事ははっきりさせないと気がすまない性格で、自分が物事に処しては徹底するという信念は父からの教訓の賜物でした。礼儀作法には特にやかましく、立派な品性と高い人格の養成が家庭教育の全部でした。従って、公私の区別を判然とすること、曲がったことが大嫌いなことが父の性格でした。

晩年は非常に気持ちが和らいで優しい父親でした。家庭で子供たちと一緒に晩飯を食べるのを楽しみにしており、母にも懇切丁寧で、昔から一方ならぬ苦勞をかけて申し訳なく思っている、お前たちもどうかお母さんには心配をかけずに親孝行をしてもらいたいと常に口にしておりました。子供に対しては、外の仕事でまったく家庭を顧みる余裕がなかった、父親としては落第点だった、お前たちは偉い人にならなくても立派な人間になってくれ、紳士として世の中を渡って貰いたいとしみじみ申ししたことがございました。」

1920年(大正9)に承認された財団法人東京歯科医学専門学校は、血脇守之助の寄付行為によって設立された。この規則で理事の一人は自動的に設立者となり、その理事は終身となり他の理事は評議員において選挙して決めるとされているので、平民血脇守之助は終身理事であった。そして理事の互選によって理事長を決ることに則り血脇守之助理事長が誕生している。そして設立者は遺言や他の方法で自分に代わるべき理事を指定することができるかと規定されていた。したがって生前に自身が退いたあとの次期理事として血縁者を指名することができたが血脇はそれをしなかった。理事会は、互選によって奥村鶴吉を理事長に選出した。血脇理事の空席には娘婿の濱野規久雄氏が1953年(昭和28)まで就任された。

1947年(昭和22)3月7日日本通夜、8日葬儀が神田水道橋、東京歯科大学ホールで東京歯科大学葬として営まれ、9日ご遺骨は松戸八柱霊園に埋骨された。

血脇イズム

血脇守之助(図5)は、明治中期から昭和の敗戦まで日本近代史のなかで活動した人物である。たまたま選んだ新しい職業の確立のために制度を作り、制度と戦ってきた生涯であった。そしてその成果は教育・医療において日本の近代化につながった出来事であるので、血脇守之助は歯科界の指導者にとどまらず日本近代国家黎明期におけるエポックメーカーでもあった。血脇の目標達成に向かって行く枯れることの無いエネルギーと知力、その志を共有して行動を一つにする奥村鶴吉、花澤 鼎、そして遠藤至六郎等々、それを支える同窓・交友。そして、青少年時代からの人的繋がりから血脇を支援する池田成彬、金杉英五郎、米田梅吉などの外部の一流人。これらの集団が一体となって日本高等教育の牙城である「大学」を獲得するまでの長いストーリーが教育制度からみた東京歯科大学史の根底である。

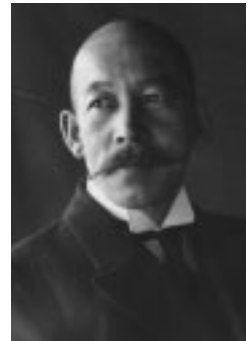


図5 血脇守之助
1919年(大正8)撮影

伝えられている「人間の陶冶」と「家族主義」は集団に対する内向きの概念である。人に後ろ指をさせられない教養と人間性をもった集団を形成し、その個々を「家族主義」として結束を図る。そしてこの集団をもってして向上を阻害する理不尽な国の制度と不条理な市民意識を変えようとした。集団を牽引できた根底には、守之助の思想である「民主主義」と不当な権力に対する闘争心があり、これが彼の知と徳によって集団の個々に十分浸透したことによったと考えられる。つまり、血脇イズムとされている複数の主義主張をリンクさせて考えれば、それらはジグソーパズルのピースであり、はめ込んでいけば「歯科医師の地位向上」という絵が完成する。

おわりに

大学創立120周年を迎える今年、歯科大学を取り巻く環境は厳しい。歯科医師の需給関係、景気の低迷、医療費抑制、医学部定員の増員などから歯科大学志願者の激減を招いている。さらには、この解決策の一端として入学者定員減が文科省から大学に要望されている。血脇イズムを見直すことはちょうど「温故知新」となる。血脇先生の一部を辿ってみて感じるのは、目線の高い目標を苦難に遭遇しながらも先頭に立って堂々と長年にわたって追いかけていく信念であり、そこから生じる矜持と品性である。

30年間お世話になった稲毛から校地を水道橋に戻す計画は、わが大学の継承と発展を意図した結果の法人の決断であり、社会変化が早い昨今から大学の市場化による競争激化、人口構造、ハードの諸現状などを考えれば時期的にはぎりぎりのタイミングではなかったかと思われる。

大学移転の実現性の可否を検討している初期過程で、大学の創立120年が視野に入ってきた。120年は人間で言う大還暦だよという故井上 裕理事長のお言葉があり、それではその時に大学移転がドッキングできればちょうどいいということとなった。120年だから移転しようという悠長なことはなかった。そして120周年記念行事を行うことは後から立てた計画であった。創立記念行事は血脇先生の時代から10周年ごとに定期的にわが校はほとんど行ってきたので、ちょうど変革時代の節目として相応しいと考えた。本来別々の事柄が時期的に合致できることから移転もその記念事業の一つとしての位置づけとした。現在でも事業構成は変わらないが、移転計画進展に齟齬をきたさないよう事業規模が異なる移転組織は記念事業の一組織から独立させたというのが現状である。

さて、本稿執筆は北海道支部連合同窓会から「血脇イズムと移転」という仮題で、同会発刊の同窓会会報第37号に掲載文の依頼を受けたことがきっかけである。本学の歴史は「東京歯科大学百年史」

をベースにしなが興味のあることについては新たに資料収集を行った。さらに同窓の水川秀海先生には多数のご自身の論文、資料の提供とご指導を頂き、さらに本稿の校閲もお願いした。本学企画調査室の椎名 裕室長、江波戸達也係長は有用な資料を入手してくれた。併せてお礼を申し上げる。

なお、名前を呼び捨てにして文を進めているが、歴史的な人物像に客観的な視点でということと血脇先生等ご理解いただけると過信している。

年 表

本学と教育制度		関連事項	
1872年(明治5)	「学制」制定	1869年(明治2)	大学東校 医学校 設立(後の東京大学医学部)
		1870年代	キリスト教や仏教などの宗教団体の私立学校が多数設立
		1874年(明治7)	「医制」を定める 東京、京都、大阪に適用
1878年(明治11) 3月	高山紀斎 米国から帰国(米国歯科医術開業資格取得)	1875年(明治8) 10月	歯科医師第1号 小幡英之助 「歯科」医籍(4号)で「歯科専門医」
	高山紀斎 「内外科」の医師免許を交付される	1879年(明治12) 2月	「医師試験規則」制定 「口中科」が消えて「歯科」
		1880年代	私立の法律学校が多数設立(後の専修大学、法政大学、明治大学、早稲田大学、日本大学など)
1886年(明治19)	帝国大学令、中学校令、小学校令、師範学校令発令	1884年(明治17)	「第1回歯科医術開業試験」
			歯科医籍として歯科医師誕生(第1号 青山千代次 高山の門下生)
1890年(明治23) 1月	高山歯科医学院開校(院長 高山紀斎)〔現存する歯科医学教育機関として最古〕	1885年(明治18)	医科・歯科とも開業試験を受けないと新規開業はできない
1893年(明治26) 4月	血脇守之助高山歯科医学院に入学	1887年(明治20)	官立5校の高等中学に医学部付設
1895年(明治28) 7月	血脇守之助 歯科医術開業資格取得	1888年(明治21)	東京歯科専門学校設立(翌年閉校)
1896年(明治29)	高山歯科医学院を含めた在京有力私学11校が「建議請願」を文部大臣に提出	1889年(明治22)	近代日本の最初の恐慌 飢餓、コレラ流行4万人死亡
	11月 野口清作 血脇守之助を訪問 高山歯科医学院学僕となる	1894～95年(明治27～28)	日清戦争
1897年(明治30)	10月 官立歯科医学校設立運動 血脇守之助 其他の35名請願書を国会両院に提出		
	10月 野口清作 高山歯科医学院講師となる(医術開業後期試験合格)		
1898年(明治31) 6月	奥村鶴吉 高山歯科医学院卒業		
1899年(明治32)	「私立学校令」制定		
1900年(明治33) 2月	野口英世 渡米		
	東京歯科医学院と名称変更(院長 血脇守之助)		
1902年(明治35) 4月	花澤 鼎 東京歯科医学院卒業		
1903年(明治36)	「専門学校令」公布、省令「公立私立専門学校規程」公布		
1904年(明治37) 9月	奥村鶴吉 ベンシルベニア大学2年編入のため渡米	1904～5年(明治37～38)	日露戦争
1906年(明治39)	「公立私立歯科医学校指定規則」制定	1905年(明治38)	無試験免許の特典 医師
	8月 奥村鶴吉 帰国 ベンシルベニア大学歯学部卒業)	1906年(明治39) 5月	医師法・歯科医師法制定(無試験免許の特典 歯科医師)
1907年(明治40) 9月	東京歯科医学専門学校設置認可(校長 血脇守之助)	1907年(明治40) 6月	共立歯科医学校(後の日本歯科大学)設立
1910年(明治43) 2月	〔歯科医学専門学校として最初〕東京歯科医学専門学校 歯科医師法の指定校となる(第1号 無試験開業資格の特典)	1910年(明治43)	米国カーネギー財団による米国カナダ医科学校調査「フレクスナー報告」(Abraham Flexner)
1911年(明治44)	「私立学校令」改正	1911年(明治44)	大阪歯科医学校(大阪歯科大学前身)設立
1918年(大正7) 12月	第1回東京歯科医学専門学校卒業生は無試験開業の特典を受ける	1914～1918年(大正3～7)	第一次世界大戦 日本経済は戦時中に好景気、戦後一転して不況
1919年(大正8)	10月 大学令および高等学校令制定		
	10月 創立30周年祝賀「財団法人化のための拡張基金募集(第1次)」		
	12月 母校拡張計画のための募金趣意書作成		
	12月 「東京歯科大学創設期成会」結成、「歯科大学創設問題演説会」開催		

本学と教育制度		関連事項	
1920年(大正9)	3月 50万円を募金額に追加 東京歯科医学専門学校の財団法人認可(理事長 血脇守之助) 4月 創立30周年記念祝賀会 9月 血脇守之助資産 303円 財団法人に寄付		
1922年(大正11)	1月 血脇守之助8ヶ月かけてヨーロッパから北米へと視察 7月 全米歯科医学学校長会議がわが国の歯科医学専門学校の卒業生には、米歯科学部の最終学年に編入できることを決議 米国では野口英世が案内 2月 鉄筋コンクリート3階建て新校舎竣工 4月 花澤新病院長 新診療システムと臨床教育が導入		
1923年(大正12)	6月7日 花澤 慶應義塾大学医学部から学位取得(歯科医師として医学博士第1号) 6月 第2次基金募集 9月1日 「歯科大学創設期成会」再発足 新校舎崩壊 慶應義塾大学医学部を、間借りし10月20日から開始し、約6ヶ月後には水道橋に戻ることができた 病院は11月10日に再開	1923年(大正12)	9月1日 関東大震災 日本の景気悪化
1924年(大正13)	3月 焼け跡に木造の2階建て校舎を2棟新築し、一応の落ち着きを見た 8月 奥村鶴吉 慈恵会医科大学から学位取得(歯科医師として医学博士第2号)	1926年(大正15)	カーネギー財団による米国カナダ歯科医学学校調査「ギース報告」(William Gies)
1927年(昭和2)	11月 校歌・校旗の発表式	1927年(昭和2)	3月 金融恐慌
		1928年(昭和3)	5月 野口英世 アフリカアクラにて客死(6月 野口英世追悼会) 10月 国が歯科医師育成機関を初めて設置 東京高等歯科医学学校(東京医科歯科大学前身)
1929年(昭和4)	10月 水道橋校舎ビル竣工 総工費786,000円	1929年(昭和4)	10月 ヴォール街から始まった世界大恐慌 日本経済は危機的状況
1937年(昭和12)	第1次近衛文相内閣 内閣に教育審議会を設置(1942年まで存続)	1931年(昭和6)	9月 満州事変
1943年(昭和18)	4月29日 血脇守之助 東京歯科医学専門学校名誉校長に推戴 奥村鶴吉が校長就任 10月 教育に関する「戦時非常措置方策」閣議決定	1932年(昭和7)	9月 欧米に先駆け景気回復
1944年(昭和19)	4月 医学専門学校と歯科医学専門学校の教育要綱・学科課程が全面改正	1937~45年(昭和12~20)	日中戦争
1945年(昭和20)	4月13日 東京へ大規模な2回目空襲 校舎は焼失を遁れる 6月 学生の疎開(1年生230名は秋田県仙北郡で、2年生200名弱は静岡県韮山8月15日の終戦は疎開地で迎える) 10月 水道橋で授業再開	1939~45年(昭和14~20)	第二次世界大戦
1946年(昭和21)	1月 日本側教育家委員会設置(委員長 南原繁) 4月15日 歯科教育審議会発足(委員長 奥村鶴吉) 4月20日 東京歯科大学設立申請(理事長 血脇守之助・学長 奥村鶴吉) 7月19日 文部大臣田中耕太郎から認可〔歯科大学として最初〕 8月 教育刷新委員会設置 委員長 安倍能成 11月 東京歯科大学設立記念式典	1941年(昭和16)	12月8日 太平洋戦争開戦
1947年(昭和22)	2月24日 血脇守之助永眠(享年77歳) 3月 教育基本法、学校教育法制定 6月 歯学部教育6年制に決定(教育刷新委員会) 1950年(昭和25)	1943年(昭和18)	10月21日 生徒出陣壮行会 12月 文科系学生・生徒の徴兵猶予は停止
1952年(昭和27)	2月20日 私立学校法制定 新制東京歯科大学認可(初代学長 奥村鶴吉)	1944年(昭和19)	6月 「学童疎開促進要綱」閣議決定
		1945年(昭和20)	1月 本土決戦の「帝国陸海軍作戦計画大綱」認可 2月 「本土決戦完遂基本要綱」 4月 歯科医師の医師試験受験(医師免許の特例公布) 8月15日 太平洋戦争(第二次世界大戦)終わる 8月30日 連合国最高司令官マッカーサー元帥 厚木に到着 9月2日 連合国最高司令部(GHQ)による占領政策始まる
		1947年(昭和22)	4月 第1回歯科医師国家試験 5月 日本国憲法施行

本学と教育制度		関連事項	
1952年(昭和27) 3月25日	東京歯科医学専門学校最終卒業証書授与式	1953年(昭和28) 8月	歯科医師法第6次改正(死亡診断書の交付認可)
1953年(昭和28) 3月	歯科学学生としてわが国で最初の大学生卒業 クラス会名:1期会		

参考文献

学内資料

- ・歯科大学創設の叫び：東京歯科大学創設期会会 1920年
- ・血脇守之助：外遊録見たまま聞いたまま（其三） 歯科学報第28巻第6号 1923年
- ・血脇日出男：父を憶う 臨床歯科学報 特集 血脇先生追悼号 第2巻第3号 臨床歯科学報社 1947年
- ・奥村 鶴吉：終戦以後 東京歯科大学同窓会報第2号 1948年
- ・東京歯科大学の改革について - 大学問題委員会答申：東京歯科大学広報第25号 1971年
- ・血脇守之助傳 学校法人東京歯科大学 1979年
- ・東京歯科大学百年史 学校法人東京歯科大学 1991年
- ・東京歯科大学市川総合病院創立50周年記念誌 学校法人東京歯科大学 1997年
- ・水川 秀海：母校のあゆみと野口英世博士 その1～3 東京歯科大学同窓会誌第312～314号 1999～2000年
- ・水川 秀海：「高山歯科医学院設立御認許願」 東京都公文書館所蔵の資料より 歯科学報第100巻第12号 1229～1236頁 2000年
- ・高添 一郎：「野口英世と東京歯科大学展」記念講演会記録 2005年
- ・金子 讓：告辞 東京歯科大学広報第223号 2007年

一般資料

- ・歯科医事衛生史 前巻 日本歯科医師会編 1940年
- ・文部科学省：日本の成長と教育（昭和37年度）
(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/index.html)
- ・斉藤 利世：北風に聴く 粟野書房 1963年
- ・今田 見信・正木 正：日本の歯科医学教育小史 医歯薬出版 1977年
- ・石川 達也：歯科先覚者物語 礎を永久に築いた血脇守之助 第1回～最終回 Dental Diamond 1979年11月～1981年1月
- ・榊原悠紀田郎：歯記列伝 クインテッセンス出版 1995年
- ・榊原悠紀田郎：続歯記列伝 クインテッセンス出版 2005年
- ・榊原悠紀田郎：歯科医学教育年表 東京歯科大学図書館 榊原記念文庫
- ・水川 秀海：歯科医療江戸から明治へ 『歴史研究』臨時増刊 在野史論 第四集 新人物往来社 1995年
- ・水川 秀海：戦後歯科医学教育の歩み 過去を知り望ましい未来を考える 歯科理工懇話会講演要旨 1996年
- ・水川 秀海：血脇守之助の訪米と野口英世 歯科界の恩人野口英世博士 長浜通信第9号 2008年
- ・坂本征三郎監修・監訳：岐路にたつ歯科教育 現状分析と改革への勧告 東北大学歯学部予防歯科学協室訳 丸善 1996年
- ・半藤 一利：昭和史 平凡社 2004年
- ・天野 郁夫：大学改革 秩序の崩壊と再編 東京大学出版会 2004年
- ・天野 郁夫：大学の誕生（上） 中央公論新書 2004年
- ・天野 郁夫：大学の誕生（下） 中央公論新書 2005年
- ・R.Bruce Donoff：It is time for a new Gies Report Journal of Dental Education 70(8):809-819 2006
- ・草原 克豪：日本の大学制度 歴史と展望 弘文堂 2008年
- ・江上 剛：我、弁明せず PHP研究所 2008年
- ・金 文子：朝鮮王妃殺害と日本人 高文研 2009年
- ・Flexner Report：Wikipedia,the free encyclopedia
- ・森山松之助 打倒台湾公共建築風貌の舵手(國史館発行DVD)：財団法人公共電視文化事業基金會 2009年

第41回東歯祭開催

第41回東歯祭が、平成21年10月31日(土)・11月1日(日)の2日間にわたり開催された。今年は「彩」がテーマとなっており、東歯祭が美しく彩られた。木村基善実行委員長(3年)を先頭に、約40名の実行委員が極度の寝不足を気力で乗り越え、企画・準備・運営にあたった。心配された天気も2日間とも雨は降らずに、両日併せて3,900名を動員した東歯祭は成功裏に終わった。

多彩な展示部門

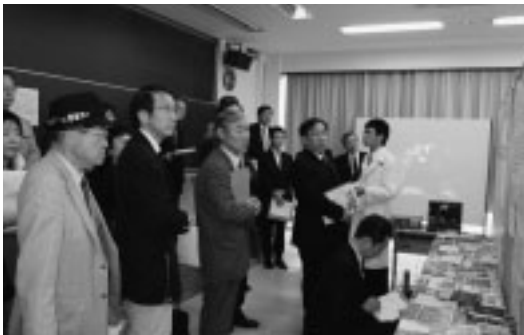
東歯祭恒例の「講座・研究室展示」は、今年も評判が良く、多くの来場者が一つ一つ丁寧に展示物を見て回っていた。

法人類学研究室と解剖学講座では、展示物全てが本物の人骨や人体の標本ということもあり見学者の関心も高く、多くの来場者が訪れた。

今回、生理学講座では「味覚」をテーマにした実験を行った。酸っぱいものを食べてもミラクルフルーツを食べると甘く感じる不思議な体験に、子供達が歓声を上げていた。

一方、スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラムの入賞展示に加え、国際渉外部主催による英語ポスターコンペティションも行われ、足を止めて熱心に見学する来場者の姿が見受けられた。

また、「クラブ展示」も例年通り行われ、国際医療研究会・自然愛好会などが、充実した活動内容を分かりやすく展示してあった。学生を中心に毎年行われている「延世大学校歯科大学との学生交流会」も来場者の興味を引き、多くの見学者を満足させていた。



丁寧な説明に耳を傾ける父兄会・同窓会役員：平成21年11月1日(日) 千葉校舎・教養棟2階

多彩な企画が盛りだくさん

31日(土)は、BIG BAND JAZZ部や、MLSが厚生棟前野外ステージで、ダンス部が講堂で日頃の練習の成果を遺憾なく発揮し、多くの観客を魅了した。

1日(日)は、「芸人お笑いライブ」が開催されることもあり、早朝から入場券を求める長蛇の列が東歯祭の盛り上がりには花を添えた。今年も人気絶頂の「サンドウィッチマン」「響」「オテンキ」の3組が揃い、1時間以上も満員の講堂を笑いの渦に巻き込んだ。

午後からは、混声合唱部の第48回定期演奏会、千葉西高校吹奏楽部による演奏会、管弦楽部が美しい歌声と音色を響かせ、訪れた人達を魅了していた。

近隣住民からも好評を得ている大学院学生会による「無料歯科相談」と歯科衛生士専門学校による「ブラッシング指導」も多くの家族連れが訪れ歯に対する関心の高さを見せた。

また、この日は入試ガイダンスも行われ、本学を目指す多くの受験者と保護者が賑やかなお祭りの中、真剣なまなざしで説明を聞いていた。



しっかり覚えて、みんなに教えてあげよう：平成21年11月1日(日) 千葉校舎・教養棟1階

賑わった模擬店の数々

講堂から厚生棟につながるユリノキ並木の通路に、20店の模擬店が軒を連ねた。先輩から引き継いだ伝統の味で勝負するクラブや、新しい味を求めて奮闘するクラブなど様々だ。両日とも昼食時には、多くの来場者と学生・教職員も訪れ大変な賑わいを見せ、来場者の胃袋をがっ

ちりと掴んでいた。



飛ぶ鳥を落とす勢いの大繁盛店：平成21年11月1日（日）千葉校舎

最後の彩り...後夜祭

1日午後5時30分から厚生棟前野外ステージにおいて、佐藤 亨学生部長をはじめとする大学幹部ご出席のもと後夜祭が開催された。

真っ黒な空から今にも雨が降りそうな空の下、木村基善東歯祭実行委員長から挨拶があった。「今年の東歯祭のテーマは彩でした。メンバー一人一人のカラーで美しく彩ることが出来ました。ここまでこれたのは仲間のお陰です。」舞台裏で撤収の準備をしながら話を聞く実行委員の横顔は、達成感で満ちあふれていた。



満足した笑顔で挨拶する木村実行委員長：平成21年11月1日（日）千葉校舎中庭ステージ

次に、佐藤学生部長より挨拶と各部門表彰が発表され、続いて井上孝国際渉外部長から、英語ポスターコンペティションの表彰も行われた。

木村実行委員長から佐藤学生部長へ花束の贈呈があり、最後は参加者全員で校歌を斉唱。小田 豊教務部長から乾杯の発声をいただき、美茶で喉を潤すと同時に大歓声上がり、同時に水かけが始まった。東歯祭は有終の美を飾り激しい水かけが続くなか終了した。

各部門表彰

クラブ展示部門

- 第1位 国際医療研究会
- 第2位 写真部
- 第3位 延世大学との学生交流

講座・研究室展示部門

- 第1位 法人類学研究室
- 第2位 微生物学講座
- 第3位 生理学講座

模擬店部門

- 第1位 美術白亜会
- 第2位 少林寺拳法部
- 第3位 自然愛好会

英語ポスターコンペティション

優勝 宇田川 小百合(3年)

「第41回東歯祭を終えて」

東歯祭実行委員長・木村基善君(3年)

実行委員長の仕事は、4月のメンバー集めから始まった。東歯祭までの半年間毎日忙しく大変でしたが、その反面一日一日が充実しており長いようで本当にあっという間の日々でした。

今年は自分を始め、非常に個性の強いメンバーが集い委員一同準備に取り組んで来ました。ハロウィンにあわせて仮装をしたり、来校して下さった方々に東京歯科大学を知ってもらうためのスタンプラリーを開催したり、 Mascotキャラクター“ピパノスケ”の周知イベントを行ったりと例年とは異なる東歯祭を目指しました。

今回のテーマは「彩」でありましたが、委員それぞれの持つ個性(カラー)で東歯祭を美しく、そして楽しく彩ることが出来たと思います。

僕は1年生の頃からこの東歯祭に関わり今年で3年目となりました。大学のカリキュラムの関係上、試験の影響で準備が遅れたり、大きなトラブルがあったりしました。特に、インフルエンザの流行には頭を痛めましたが、結果的に大事にならなくて良かったです。

この3年を振り返ってみると「本当に大変だったなあ。」と改めて感じます。しかし、それでも辞めることが出来なかったのは、この実行委員を通して学年を超えた仲間を集めて一つの目標に向

かっていくこの楽しさ、普通の学生生活の中では得ることの出来ない大きな責任の中に潜む使命感、そしてやり遂げたという何物にも代え難い達成感という大きな魅力があったからだと思う。

来年の第42回東歯祭は、東京歯科大学創立120周年ということで、今年以上に大きなものになりそうですが、今後も東歯祭の魅力を失うことなくより素晴らしいものと成ることを願います。

最後になりましたが、来校してくださった近隣住民の方々を始め、父兄の皆様、本学関係者、そしてこの東歯祭の運営に協力くださった全ての方々へこの場をお借りして感謝いたします。本当にありがとうございました。

東歯祭スナップ



大人気の“ピパノスケ”と共に：平成21年10月31日(土)、千葉校舎



おいしい玉こんにゃくはいかがですか：平成21年10月31日(土)、千葉校舎



英語ポスターコンペティションの様子：平成21年10月31日(土)、千葉校舎ラウンジ



最後に東歯祭実行委員会メンバーで記念撮影：平成21年10月31日(土)、千葉校舎

学内ニュース

第294回大学院セミナー開催

平成21年9月17日(木)午後6時より千葉校舎第3教室において、第294回大学院セミナーが行われた。今回は、アイオワ大学歯学部歯学部予防・公衆歯科学講座 Steven M. Levy 教授をお招きし、教授が主宰しているIowa Fluoride Study(IFS)の概要と、これまで得られた知見に関する講演をして頂いた。Levy教授はフッ素研究の世界的第一人者であり、歯学部の教授のみならず、アイオワ大学の他の学部(Public Health)や研究所の教授も兼任されている方である。

IFSは1,374名の小児の生下時からの前向きコーホート調査であり、齲蝕と斑状歯、成長発育班そして骨研究の3つのグループに別れて研究活動が行われている。今回のセミナーで紹介された研究の中で興味深かったのは、小児が摂取している飲食物を詳細に分析することによって、摂取フッ素量を推定し、推定摂取量と斑状歯発現との関連性を調査した研究の紹介と、乳幼児期のアモキシシリン服薬の既往がフッ素摂取量ともあいまって、永久歯にエナメル石灰化障害が発現するという研究であった。また、アメリカで市販されているコーラの中には、フッ素濃度が1ppmを超えるものもあるという説明をされた時は、聴講者一同からどよめきが起こった。

以上、本セミナーは齲蝕予防に関わるフッ素の応用法、例えば小児の年齢別にみた歯磨剤の使用量などを再検討する上で非常に有意義なものであった。



講演されるLevy 教授：平成21年9月17日(木)、千葉校舎第3教室

水道橋移転計画に関する教職員(千葉校舎・水道橋校舎)への説明会開催

水道橋移転計画の更なる周知をはかるため、10月5日(月)午後6時から千葉校舎講堂において水道橋移転計画に関する教職員への説明会が開催された。

今回の説明会は、去る7月25日(土)、TDCビル血脇記念ホールにて行われた移転計画説明会で出席対象とならなかった千葉校舎教職員を対象として開催され、助教、レジデント、大学院生、臨床研修歯科医や医療系・事務系職員等318名が出席して行われた。

説明会は、高野伸夫法人主事の司会により進行し、まず始めに、金子 譲学長より水道橋移転の趣旨等についてご説明をいただいた。続いて、井出吉信副学長・建設担当常務理事より水道橋校舎建設計画の概要についてご説明をいただき、その後、薬師寺 仁副学長・財務担当常務理事より閉会の挨拶が述べられ、説明会は滞りなく終了した。

水道橋校舎では、11月4日(水)午後6時30分より血脇記念ホールにて、水道橋病院所属の教職員、レジデント、臨床研修歯科医、医療系・事務系職員等および法人事務局の職員129名が出席して、千葉校舎と同様の説明会が開催された。



移転について説明をする金子学長：平成21年10月5日(月)、千葉校舎講堂

縣 秀栄講師 デンツブライ賞を受賞

平成21年10月9日(金)に名古屋国際会議場で開催された第37回日本歯科麻酔学会総会・学術集会において、市川総合病院麻酔科の縣 秀栄講師がデンツブライ賞を受賞した(演題名：「顎変

形症術後痛覚過敏に及ぼす術中レミフェンタニル濃度の影響」)。デンプライ賞は国内歯科学会において歯科学の発展に寄与する優れた研究発表に対し贈られる学術奨励賞で、現在8つの学会で実施されている。

本研究は2年前より国内で使用が可能になった麻薬性鎮痛薬レミフェンタニルの問題点の一つである術後痛覚過敏の発生が、顎変形症手術後でも術中のレミフェンタニルの使用量により発生し得ることを示した内容である。

現在、市川総合病院麻酔科では、この術後痛覚過敏に対する対策を様々なアプローチで研究を進めているところである。



授賞した縣講師(後列中央):平成21年10月9日(金)
名古屋国際会議場

第295回大学院セミナー開催

平成21年10月13日(火)午後6時より千葉校舎第2教室において、第295回大学院セミナーが開催された。今回は長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科小児歯科学分野の藤原 卓教授を講師にお迎えして「齲蝕病原細菌のビルレンス因子」と題する講演を伺った。

齲蝕病原菌ミュータンスレンサ球菌の一つで



講演される藤原教授:平成21年10月13日(火) 千葉校舎第2教室

あるS. mutansはグルコシルトランスフェラーゼ(GTF)という酵素によってスクロースから付着性グルカンを産生し、歯面に付着してデンタルプラークを形成するが、このデンタルプラークこそがビルレンス因子であり、これには3つのグルコシルトランスフェラーゼ(GTFB、GTFC、GTFD)が関与しているという基本的な内容からお話しいただいた。これらの3つのGTFがそれぞれ細菌の歯面付着にどのように関与しているかを、様々な実験の経緯、結果、考察を通じてご紹介いただき、内容の濃い有意義な1時間半のセミナーであった。

第296回大学院セミナー開催

平成21年10月14日(水)午後6時より千葉校舎第1教室において、第296回大学院セミナーが開催された。今回は九州大学大学院歯学研究科口腔機能修復学講座 咀嚼機能再建分野の古谷野 潔教授を講師にお迎えして、「臨床研究における計測方法を考える:ブラキシズムの評価方法を中心に」と題する講演を伺った。

本講演では、ブラキシズムをテーマとして平成19年にイタリアのカプリ島で開催されたJournal of Oral Rehabilitation Summer Schoolでディスカッションされた内容の一部を中心にお話しいただいた。ブラキシズムの評価方法である質問表、臨床所見、オーラルアプライアンス、筋活動の記録、ポリソノグラフィーの短所長所について、研究データを示しながら大変分かり易く解説していただいた。さらに、それを踏まえて臨床研究における計測方法の問題点、注意点に関して示していただき、大変内容の濃い有意義な1時間半のセミナーであった。



講演される古谷野教授:平成21年10月14日(水) 千葉校舎第1教室

平成21年度職員研修の実施

職員研修運営委員会が企画・運営する平成21年度職員研修会は、10月16日(金)に千葉校舎にて、各施設から推薦された職員18名の参加により実施された。

今回の研修は、大学がおかれた現状と今後の状況等についての講義を受講し、また各自が所管業務の内容や改善点をもとに意見交換し、「大学職員として何か必要か」「どのような職員を目指すべきか」「問題点は何か」「どのような改善を行うべきか」について討議・発表を行うことで、意識改革をはかることを主な目的とした研修であった。

千葉校舎第1会議室において、高野伸夫法人主事からの挨拶と、太田 茂法人事課長から研修の目的・内容・方法等についての説明があった後、二人ひと組みになって参加者紹介を実施した。

続いて、井出吉信副学長より「東京歯科大学の現状とこれから」をテーマに、今後の歯科大学競争時代における大学職員の役割や本学のこれから等について、約1時間の講義をしていただいた後、外部研修の参加報告として、千葉病院庶務課塩野目隆幸用度係長と大学会計課大塚 健事務員から私大連研修会の報告がそれぞれ15分間行われた。講義の後、参加者は3グループに分かれ、午後の討議の事前打合せを行った。

昼食を挟み、午前の講演や事前学習をもとに、今後の大学のあり方について討議を行い、さらに、各自の所属する系の業務概要と業務を通して感じている問題点等の個人発表を行った。

大学全体と個人の業務の両方の視点から、本学の発展のための意見交換を行ったうえで、グループ別発表内容について討議と準備を行い、



平成21年度職員一日研修全体写真：平成21年10月16日(金)、千葉校舎第一会議室

最後に、今回の研修結果をグループ別に発表し、質疑応答、全体ディスカッションを行い、活発な意見交換がなされた。

参加者にとって、大学職員としての意識を高め、今後の職員のあり方の考察等を通じて自己啓発につながり、大変有意義な研修となった。



平成21年度職員一日研修グループ別討議：平成21年10月16日(金)、千葉校舎会議室

第288回東京歯科大学学会総会開催

平成21年10月17日(土)・18(日)の両日、千葉校舎と水道橋校舎において東京歯科大学学会総会が開催された。

初日の口演は第1・2教室、示説はラウンジ2・3を会場として発表された。今回発表された口演は31題、示説は16題であった。午後からは平成21年度東京歯科大学学会評議員会・総会が第1教室で、引き続き同教室で口腔外科学講座の恩田健志助教の「プロテオミクス解析による口腔扁平上皮癌の転移関連遺伝子群の探索」、市川総合病院小児科の佐々木悟郎助教による「細菌人工染色体導入マウスを用いた *in vivo* 解析により明らかになった Steroidogenic acute regulatory protein のミトコンドリア標的シグナルの必要性」と題した2題の学長奨励研究賞受賞講演が行われた。その後、講堂において口腔健康臨床科学講座の柿澤 卓教授による「水道橋病院が歩んだ30年と将来」の特別講演が開催された。

第2日目は水道橋校舎の血脇記念ホールを会場として、午前中は姉妹校の延世大学校歯科大学との合同シンポジウム「歯周病の基礎的エビデンス」と題した3題の講演が行われた。午後からは苦情・クレーム対応アドバイザーの関根真一氏による『歯科医院の苦情は、患者の信頼度「医療安全」と「日本苦情白書」から』と題した招待講

演が行われ、引き続き開催されたシンポジウム「歯周再生療法の新たなる潮流」では3名の演者による講演と活発なディスカッションが繰り広げられ、総会は盛会裡に終了した。



特別講演終了後の柿澤教授を囲んで：平成21年10月17日(土) 千葉校舎講堂



招待講演中の関根氏：平成21年10月18日(日) 水道橋校舎血脇記念ホール

「大学と同窓会クラス代表との懇談会」を開催
「第5回大学と同窓会クラス代表との懇談会」は平成21年10月22日(木)に水道橋校舎血脇記念ホールにて開催された。各卒業年次の同窓クラス代表者ならびに同伴者約90名以上の参加を得て、同窓の先生方の大学への例年以上の関心の深さを実感した。

本年は大学から熱田俊之助理事長、金子 讓学長、薬師寺 仁副学長、井出吉信副学長、高野伸夫法人主事、同窓会から大山萬夫会長が出席した。懇談会開始前にTDCテナントビルから新たに改装された13階の教室の見学を行った。

薬師寺副学長による開会の言葉、続いて熱田理事長、大山会長からのご挨拶の後、金子学長が「水道橋移転と大学の現況」というテーマで水道橋移転への現在の準備状況、歯科医学教育、歯学部の実務問題、研究、国際交流、120周年記

念事業、などについて資料を元に詳しく説明された。

続いて薬師寺副学長から「創立120周年記念式典・祝賀会ならびに記念学術講演会」について報告があり、最後に井出副学長から「水道橋移転と学生教育の現状」について説明があった。その後の質疑応答には移転計画を含めて数々の質問があり、予定時間を少々オーバーしたが、質問に対する回答には十分な理解を得て終了した。

懇談会終了後、東京ドームホテルに会場を移した懇親会では、年代を超えた参加者各位が和やかに歓談し、第5回大学と同窓会クラス代表との懇談会は盛会裡に終了した。



「大学の現況」を説明する金子学長：平成21年10月22日(木) 水道橋校舎血脇記念ホール

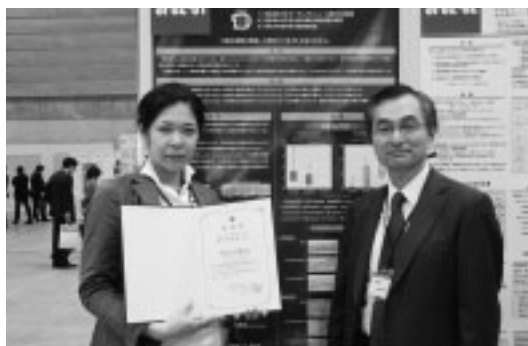


懇親会で挨拶をする金子学長：平成21年10月22日(木) 東京ドームホテル

野口沙希大学院生 優秀演題賞を受賞

平成21年10月22日(木)～24日(土)にパシフィコ横浜(神奈川県横浜市)で開催された第47回日本癌治療学会学術集会で、オーラルメディスン・口腔外科学講座の野口沙希大学院生が優秀演題賞を受賞した(演題名:「早期舌扁平上皮癌におけるCytokeratin13および17の発現に関する検討」)。受賞対象となった研究内容は、ヒト早期舌扁平上

皮膚癌の診断に関するもので、癌とその周囲に見られる上皮性異形成に対し、リアルタイムPCRおよび免疫組織化学染色を用いてCytokeratin13および17の発現をみたものである。結果、Cytokeratin13は上皮性異形成から癌への移行でその発現が減少し、一方Cytokeratin17は上皮性異形成から癌への移行でその発現が増加した。この特異的な発現結果が、癌移行期病変の診断を補う有用な手段となり得ることを明らかにしたことが評価対象とされた。さらに本研究は実際の臨床へフィードバックできることに主眼を置いた基礎研究であることにも評価を受けていた。今後の更なる研究の発展が期待される場所である。



授賞した野口大学院生(左)と山根源之教授：平成21年10月23日(金) パシフィコ横浜

第87回歯科医学教育セミナー開催

平成21年10月26日(月)午後6時より千葉校舎第2教室において、第87回歯科医学教育セミナーが開催された。今回は、「個々の患者ニーズに応えられる歯科医師養成 平成21年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム選定取組」について歯科医学教育開発センター主任の河田英司教授より説明が行われた。

まずはじめに、今回のプログラムの申請・選定状況について、医歯学系大学で選定された取り組み全般を紹介した。その中で本学は、今回の取り組みで歯学部の中で唯一採択された大学とのこと。

次に、本取組は現代社会が歯学部教育に求めるものを「安心・信頼して診療を任せることができる歯科医師としての人間力」として、「総合診療計画立案能力養成プログラム」と称し、従来より行われている、「6年一貫したコミュニケーション

教育」、「医療倫理教育」をはじめとした、「臨床系科目」、「基礎系科目」、「統合型科目」でシミュレーションを超えたりリアルな患者さんの声で学生を育成したい旨説明した。

また、ペイシェント・コミュニティ(P-Com：歯科医学教育への協力を賛同し、登録した患者さん及び父兄会等で構成)を設立し、プログラム委員会(実施グループ・改善グループ)、ポートフォリオ評価委員会、P-Com運営委員会等を組織して360度評価等を導入していくことで、本取組が常に適正に行われるよう評価システムを整備していく旨説明した。

最後に、本取組の実施計画を説明し、学生がより充実した教育を受けられるよう、全学的な協力を依頼した。

当日は120名近い参加者が集まり、質疑応答も活発に行われ大変有意義なセミナーとなった。



説明する河田歯科医学教育開発センター主任：平成21年10月26日(月) 千葉校舎第2教室

平成21年度第5回水道橋病院教職員研修会開催

平成21年10月26日(月)午後5時30分から、平成21年度第5回水道橋病院教職員研修会が開催された。今回は、学術・教養に関する研修として、口腔健康臨床科学講座障害者歯科学分野の大多和由美准教授による「スペシャルニーズデンティストリー、特に発達障害の人への対応について」と題した講演があった。大多和准教授は、3年間の「茨城県身体障害者小児歯科治療センター」への出向期間を終了し、平成21年9月1日付で水道橋病院に復職、同時に9月から新たに設けられた水道橋病院障害者歯科科長に就任された。今回の講演は新設された障害者歯科で対応する患者について水道橋病院に勤務する全教職員に解説を兼ねた内容であった。

講演は、まず健康と障害の位置づけを、2001年に改訂されたWHOの「国際生活機能分類 (ICF: International Classification of Functioning, Disability and Health)」の概念図を示し解説された。改訂前の国際障害分類では障害者のマイナス面を分類していたことに対し、現在は生活機能というプラス面からみた分類に変更されたことを分かりやすく説明された。さらに今回の演題にもある「スペシャルニーズ」のある人という用語について説明があった。そこでは、小児、高齢者並びに障害のある人とスペシャルニーズのある人とがどういう位置づけで使用されている用語であるかについてわかりやすく解説があった。

続いて今回の副題となっている「発達障害」について説明があった。「発達障害」とは、平成17年4月に施行された「発達障害者支援法」により明確に定義されたこと、さらにこれが歯科医療従事者の立場として具体的な支援方法の構築の基になっていることなどの概略を説明した後、学習障害、注意欠陥多動性障害、広汎性発達障害、高機能自閉症並びにアスペルガー症候群などの障害について、それぞれの特徴を詳細に解説された。またさらに学習障害、注意欠陥多動性障害および高機能自閉症については、これらの障害の相互の関連性について説明が加えられた。発達障害は決して小児期に限局した障害ではなく、注意欠陥多動性障害などは成人でも一部の症状が残っていることもあり、臨床の実際では決して稀な障害ではないことも紹介された。

最後に障害児・者に対する歯科診療にあたり具体的な対応方法について症例を示し分かりやすく説明があった。すなわち歯科診療にあたって歯科医師や歯科衛生士などが障害児・者に説

明や指示を行う場合には、簡潔かつ具体的に話しをする必要があることを強調され約1時間の講演を終了した。

今回の講演内容は、医療系職員のみならず事務系職員も窓口業務などで直ちに活用できることから、参加者は終始熱心に聴講し、大変有意義な研修会となった。

第297回大学院セミナー開催

平成21年10月29日(木)午後6時より千葉校舎第2教室において、第297回大学院セミナーが開催された。今回は横浜市で開業されている丸森英史先生を講師にお迎えして「歯科医療を変える食育」と題する講演を伺った。

歯科の二大疾患である歯周病や齲蝕は関連する細菌が特定され、それをいかにコントロールするかが治療の主体でしたが、丸森先生はこれに加えて生活習慣、食事、食育が深く関連することにつきまして御講演いただきました。

特にここ20年くらいの急激な社会の変動は食生活にまで影響を及ぼし、ペットボトルの清涼飲料水を片手にファストフードを食べる生活は、日常ではあたり前のように見られる光景となりました。しかしこれが生活習慣となってしまうと肥満、メタボリックシンドローム、2型糖尿病という悪循環が世界的にも問題視されており、政府も食育推進を政策の一つの柱として重要視しています。歯科においては以前より砂糖摂取に関して食育をやってきたのですが、改めて生活習慣、食事と口腔内所見の関連性を提起されていました。

講演の中では先生が経験された長期経過を追った多数の症例で、食事や生活習慣が変わる前後



講演する大多和准教授：平成21年10月26日(月)水道橋校舎血脳記念ホール



講演される丸森先生：平成21年10月29日(木)千葉校舎第2教室

で劇的に変化してくる歯肉の状態を提示され、さらには患者様の食事、生活習慣を変えるための指導方法やコミュニケーション法など、実際に臨床の現場で実践されている方法を紹介していただきました。また糖尿病などの生活習慣病が進行する流れの中で齲蝕や歯周病はその上流に位置すると考えられるので、歯科はこの点からも食育の一翼を担う必要性を強調されていました。

当日は講演が終了してからも参加者から多数の質問が出され、この領域に対する関心の高さがうかがわれたセミナーであった。

入試ガイダンス開催

東京歯科大学への入学を希望する受験生を対象として、平成21年度入試ガイダンスが東歯祭期間中の平成21年11月1日(日)に午後1時から千葉校舎第1、2教室で開催された。

小田 豊教務部長の挨拶の後、摂食・嚥下リハビリテーション・地域歯科診療支援科の石田 瞭講師、微生物学講座の石原和幸教授による「模擬授業」を行い、大学で学ぶ歯科医学専門科目に関する内容の一端を紹介した。続いて、CBT体験、入試科目のポイント、入試概要、大学案内、学生生活の説明の後、学内見学を行い、希望者には個別相談を実施した。学内見学では、臨床基礎実習室、解剖標本室、図書館、千葉病院受付、診療室などを回り、各所の教職員の協力のもとに、東歯大の伝統、貴重な史料や標本、充実した設備等を示すとともに、本学の無線LAN環境、CBT用PCの設置環境など充実した情報関係設備についても参加者に体験していただいた。

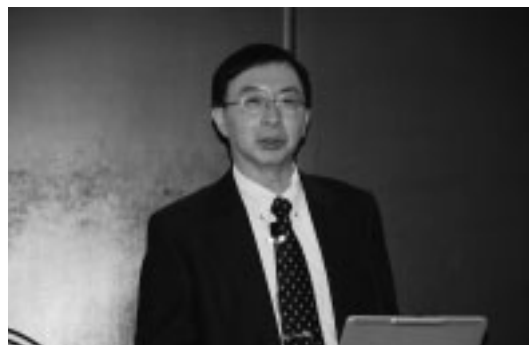


模擬授業風景：平成21年11月1日(日)、千葉校舎第2教室

第298回大学院セミナー開催

平成21年11月4日(水)午後6時より千葉校舎第1教室において、第298回大学院セミナーが開催された。今回は中途障害の摂食・嚥下リハビリテーションでは、日本の草分け的な存在でおられる浜松市リハビリテーション病院院長の藤島一郎先生を講師にお迎えして、「嚥下障害の評価とリハビリテーション」と題する講演を伺った。全体に藤島先生の視点からの新しい手技に関わる興味深い講演であった。

スクリーニング検査について、藤島先生が初期に作られた「嚥下障害に関する質問」は、感度、特異度ともに優れ、VF、VEなどの画像検査が困難な環境においても有用であると再認識した。また、新しいMASA(Mann Assessment of Swallowing Ability)という手技の有用性について解説いただいた。リハビリ手技についても運動生理学の原理から見つめ直した視点は、大学院研究の基本姿勢にも通じる、示唆に富んだ1時間のセミナーであった。



講演される藤島先生：平成21年11月4日(水)、千葉校舎第1教室

齋藤 淳講師 日本歯科医学教育学会で奨励賞を受賞

平成21年11月6日(金)、7日(土)に第28回日本歯科医学教育学会総会および学術大会(大会長：高田 隆広島大学歯学部長)が広島市で行われた。6日には学会各賞の表彰式が執り行われ、口腔健康臨床科学講座の齋藤 淳講師が、第7回日本歯科医学教育学会奨励賞を受賞した。本表彰制度は、歯科医学教育の分野において優れた業績を挙げた会員を表彰するとともに、歯科医学教育者の育成を図り、本会の発展を期することを趣旨とし、デンツプライ三金株式会社の後援のもと設

けられている。過去3年間に日本歯科医学教育学会雑誌又は他の歯科医学教育関係の英文誌に掲載された原著論文が選考対象となるが、選考基準は論文に十分な理論的背景があり、科学的根拠が備わっていること、内容が独創的であり、その課題に関して更なる発展が期待できること、とされている。齋藤講師の論文「Development of an international collaborative dental hygiene programme between Japan and Canada」(Int J Dent Hyg 6: 328-336, 2008)は、宮城高等歯科衛生士学院とカナダのVancouver Community CollegeおよびUniversity of British Columbia歯科衛生学科との海外研修プログラムの構築と評価についての内容となっている。歯科医学教育のグローバル化の必要性が認識されている現在、全国初の3年制歯科衛生士教育に国際的な教員間、学生間の相互研修を導入し、その成果を継続的に評価している点が高く評価された。



受賞した齋藤講師(前列向かって右) 学会各賞の表彰式:平成21年11月6日(金) 広島国際会議場

第299回大学院セミナー開催

平成21年11月9日(月)午後6時より千葉校舎第2教室において第299回大学院セミナーが開催された。今回は、韓国・慶熙大学校歯科大学補綴学教室の崔 大均主任教授を講師にお迎えし“補綴治療における咬合診断と臨床適用”と題する講演を伺った。まず、補綴治療における咬合診断について、咬合の不調和による歯及び歯列とその周囲組織、そして顎関節および神経筋等を含む顎口腔系の機能的異常の有無および程度を診断する事が大切で、これは個々の歯の形態もしくは上下歯の接触関係等の単純な診断ではなく総合的な評価が必要であり、そのためには問診、視診、触診等を通して既往歴と現症を記録しレ

ントゲンおよび模型を咬合器に付着して資料として活用すべきであり、治療方針の基本がいかにかに重要であるか、そして単に理想的咬合でない事がかならずしも咬合治療の対象ではないが、審美性や機能的にそれが顎口腔系に悪影響を及ぼす可能性がある判断できる場合には、その治療の対象になる事を自身の臨床をどうしてスライドをもって説明された。さらに、咬合に問題があって来院する患者は日常臨床においてよく見られ、その軽重の差異によって一歯から全ての歯まで、その治療の内容は多様である。咬合の異常のある患者の場合、少なれば一歯から多ければ全ての歯を最終的には補綴治療に及ぶ場合まで色々であるが、全て満足な結果を期待することは大変難しく上手いいかない場合もでてくる。それは治療内容が多い程難しくなる事は事実ではあるが、実は治療内容の多様性よりは咬合に対する最初の診断が正確に確立できなかったためであると自身の失敗例を用いながらいかに咬合診断が重要であるかを力説され、安易な診断は最終的には失敗につながる事をその基本からの最終補綴物にいたるまで自身の補綴臨床からみた講義であった。当日は、大学院セミナーではあるが臨床研修医や他大学からも本セミナーの聴講を希望され参加されていた。若手の先生方にとっては、非常に意義ある臨床セミナーとなったと思われる。



講演される崔教授:平成21年11月9日(月) 千葉校舎第2教室

推薦入学選考、帰国子女・留学生特別選抜、学士編入学試験実施

平成21年11月14日(土)平成22年度推薦入学選考、帰国子女・留学生特別選抜、学士編入学試験が今年度より水道橋校舎で実施された。推薦

入学選考、帰国子女・留学生特別選抜では、78名(指定校制含む)の志願者があり、午前中に小論文、小テスト、午後には面接試験が行われた。学士編入学試験では、11名の志願者があり、小論文・小テストおよび面接試験が行われた。学士編入学試験の合格者は、来年度の第2学年に編入する。なお、合格者には11月17日(火)に合格通知が発送された。

第88回歯科医学教育セミナー開催

平成21年11月16日(月)午後6時より千葉校舎第2教室において、第88回歯科医学教育セミナーが開催された。今回は、東京工業大学大学院社会理工学研究科の前川眞一教授をお招きし「項目反応理論を用いた成績評価について」と題した講演を伺った。

まずはじめに、教育環境が急激に変化していると同時に、学習成果を測定する試験の役割が現代にいたっては大きく変化している旨説明された。

特に、医歯薬系大学においては共用試験を導入しているが、モデル・コア・カリキュラムの進捗、臨床実習の開始時期が大学により異なっているため、適切な評価を行う場合は、それぞれに試験問題が必要になり、テスト問題の難易度と受験生の能力を分離して考える必要がある旨説明された。

そこで、項目反応理論を用いて、項目特性曲線等を表すことにより試験問題を妥当に評価し、異なる時期に異なる問題で試験を実施しても同等の評価をすることができる旨説明された。

当日は100名近い参加者が集まり、質疑応答も活発に行われ大変有意義なセミナーとなった。



講演される前川教授：平成21年11月16日(月)、千葉校舎第2教室

第300回大学院セミナー開催

平成21年11月18日(水)午後6時より千葉校舎第1教室において、第300回大学院セミナーが開催された。今回は朝日大学歯学部口腔病態医療学講座の永山元彦准教授を講師にお迎えして「頭蓋底の軟骨結合について その成長を制御する分子群」と題する講演を伺った。頭蓋底は後頭骨基底、蝶形骨、篩骨ならびに前頭骨から構成される。頭蓋底には軟骨結合とよばれる非常に特徴的な軟骨組織がこれらの骨間に存在し、骨化成長点として、特に前後軸方向への頭蓋底の伸長に寄与すると同時に頭蓋顔面骨の成長全体に重要な役割を担っている。講演ではこの軟骨成長板の成長を制御する分子メカニズムを解明する目的で、骨格形成を含む種々の組織の発生過程において重要な役割を果たすインディアンヘッジホッグ(Ihh)シグナルとベータカテニン(Wnt/ β -catenin)シグナルに着目し、ノックアウトマウスを用いて発生過程における頭蓋底軟骨結合への影響を示された。Ihh遺伝子ノックアウトマウスでは、軟骨成長板を構成する軟骨細胞が早熟することにより早く骨組織に置換され、反対にWnt/ β -cateninシグナルを不活性化させたマウスでは、軟骨細胞の成熟は遅延した。これらの結果から、軟骨成長板の成長過程において軟骨細胞の成熟を正と負に調節する分子群の両者のバランスが大変重要であることを示された。さらにこれらの制御機構には副甲状腺関連タンパク(PTHrP)やWntのアンタゴニストのsFRP-1が両者を仲介していると述べられた。セミナー会場では基礎系、臨床系の教員、学生が聴講し、講演後には活発な質疑応答がなされ、多くの示唆を含む非常に有意義なセミナーであった。



講演される永山准教授：平成21年11月18日(水)、千葉校舎第1教室

がんプロフェッショナル養成プラン インテンシブコース「がん医療現場での口腔ケア」を開催

平成21年11月20日(金) 市川総合病院において、がんプロフェッショナル養成プランのインテンシブコースとして、「がん医療現場での口腔ケア」セミナーを開催した。がんプロでは大学院生の教育と併行しインテンシブコースとして、医師も含めた医療スタッフに対して臨床のスキルアップを図るコースを設けることが要求されている。医療の現場での「口腔ケア」の重要性が認識され、特にがん医療では適切に口腔ケアを行うことで化学療法・放射線治療に際しての口腔粘膜炎、手術後の誤嚥性肺炎や消化管術後感染を予防あるいは症状が軽減することがわかっている。今回は看護師・歯科衛生士を対象に、病棟看護に歯科大学としての特性を活かして口腔ケアを先駆的に取り入れた本市川総合病院において、口腔ケアの重要性と効果的方法を解説し、実際に病棟で口腔ケアの見学と実習を行うセミナーを開催した。参加者はがんプロに参加している9大学、千葉県内がん拠点病院、歯科衛生士専門学校等に所属する看護師27名、歯科衛生士5名であった。柳澤孝彰大学院研究科長、濱野孝子市川総合病院副院長の挨拶に続いて片倉 朗コーディネーター(口腔健康臨床科学口腔外科准教授)の進行で講義と実習が行われた。講義は山根源之教授(口腔がんセンター)、中川種昭慶應義塾大学教授(歯科口腔外科学)、外木守雄准教授(オーラルメディスン・口腔外科学)が担当し、医療現場での歯科と医科の連携と口腔ケアの重要性・口腔内細菌と全身とのかかわり・口腔ケアのエビデンスについて解説した。午後からは馬場里奈歯科衛生士・奥井沙織歯科衛生士(市川

総合病院歯科・口腔外科)を中心に口腔がんセンターと市川総合病院歯科・口腔外科のスタッフの協力のもと口腔ケアの相互実習と実際の入院患者のケアの見学を行った。

参加者からは、看護師と歯科衛生士の連携の重要性を認識し、実際の現場で適切な口腔ケアの方法とその効果を学習する大変良い機会となったとの声が多数寄せられた。また、市川総合病院での日頃からの口腔ケアへの取り組みも高く評価された。本セミナーは今後も年に1回継続して行い、症状に応じたケアの方法なども網羅したプログラムを作る予定である。

平成21年度修学指導関係者・父兄個別面談会開催

平成21年度修学指導関係者・父兄個別面談会が平成21年11月21日(土)に千葉校舎で開催された。

第1学年から第5学年の修学指導を必要とする学生は、保護者及び学生と学年主任(クラス主任)・副主任による三者面談方式で行われた。

第6学年は、12月19日(土)に千葉校舎で予定されている。

平成21年度第6回水道橋病院教職員研修会開催

平成21年11月24日(火)午後5時30分より、水道橋校舎血脇記念ホールにおいて、平成21年度第6回水道橋病院教職員研修会が開催された。今回は、医療安全に関する研修会として、「最近の医療過誤事件及び患者への対応」と題して、水道橋病院顧問弁護士の江坂春彦先生にご講演いただいた。

初めに、東京地裁に医療民事部という医療訴訟に関する専門の部署が設置されたことが報告され、最近の傾向として、医師の説明不足から訴訟につながるケースが多く、患者が十分な理解を得られるような説明が求められていることが示された。特に、治療や検査にあたっては、予め全ての選択肢と、それぞれにどのような効果およびリスクがあるかを明示し、選択した方法がどういった理由で最良なのかを詳細に説明することが必要であるとのことであった。また、訴訟の対象となった場合、主訴および症状に基づき総合的に判断し、適切な診断と処置が選択・実施されたかどうか、過失の判断の重要な要素となることであった。



病棟で歯科衛生士から口腔ケアの指導を受ける受講生：
平成21年11月20日(金) 市川総合病院

次に、最近の問題として、悪意のある患者に対する対応について説明された。初期の対応として、何かの申告があった際、予想される範囲内であればそのまま治療を行い、そうでない場合は他の医師の意見を求めることが大切とのことであった。さらに、次の段階として、痛みが取れているはずなのにまだ痛い場合など、何か普通と違うと感じた場合、複数の医師と事務で対応することにより、病院として組織的に対応するべきであるとのことであった。また、始末書や詫状等を要求されても応じる義務はなく、診断書についてはどこに出すかを確認した上で、悪用されない内容とすること、さらに、インターネット上での誹謗中傷があった場合は、公的に対応すべきであると示唆された。

ご講演の内容を踏まえ、日常の診療にあたり、特に患者に対しては丁寧に説明をするよう心がけることが重要であると認識を深めた研修会であった。



講演される江坂先生：平成21年11月24日（火）水道橋校舎血脇記念ホール

平成21年度医学教育等関係業務功労者表彰 (文部科学省)を受ける

水道橋病院 主任歯科衛生士 荒木みさ子氏

市川総合病院 歯科口腔外科主任看護師

森 美喜子氏

歯学部・医学部及び附属病院等において、教育・研究・患者診療等に長期間従事し、顕著な功労があった者に授与される当該表彰において、本学から推薦された水道橋病院長の荒木みさ子主任歯科衛生士並びに市川総合病院の森 美喜子歯科口腔外科主任看護師が、全国の大学より推薦された候補者の中から、今年度の受賞者として選ばれた。

荒木氏は、約37年間の長きにわたり、歯科衛

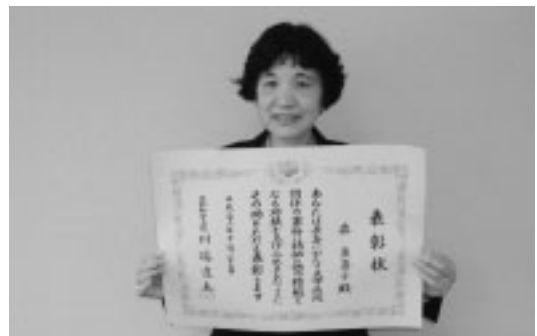
生士業務に従事し、同時に、主任歯科衛生士として歯科衛生士の業務管理、人材育成に努め、円滑な診療体制の構築に心血を注ぎ、病院の発展に大きく寄与してきた。その温厚かつ誠実な人柄と、協調性、積極性に富んだ姿勢で、周囲から信頼され、高い評価を得ている。

森氏は看護師として、約36年間にわたり看護業務に従事し、様々なスタッフとの連携を図り、幅広い業務に率先して取り組んできた。明るい人柄と堅実な仕事内容により、医療チーム内での信頼も厚く、患者からも慕われ、多くの人々に温かい医療を提供している。

それぞれの立場において、他の職員の模範となり、病院の発展に貢献してきたことが高く評価され、今回の表彰となったものである。



表彰を受けた荒木氏：平成21年11月25日（水）



表彰を受けた森氏：平成21年11月25日（水）

第301回大学院セミナー開催

平成21年11月26日（木）午後6時より千葉校舎第1教室において、第301回大学院セミナーが開催された。今回は朝日大学歯学部口腔機能修復学講座歯科理工学分野の土井 豊教授を講師にお迎えして「炭酸含有アパタイトセラミックス - 基礎と臨床応用への可能性 - 」と題する講演を伺った。

骨アパタイトに類似した炭酸含有アパタイト

(CA)に着目され、それらの合成と焼結を試み、約12wt%の炭酸イオンを含有する試料では750の加熱で緻密度、硬さとも最高となることが示された。焼結CAの弱酸中での溶解挙動は、脱有機骨アパタイトおよび-TCPの溶解挙動に極めて類似し、HA焼結体に比べ著しく溶解し易いことが明らかとされた。また、焼結CAが生体親和性に優れ、生体内で破骨細胞により吸収され得ることを示し、骨補填材、殊に骨組織工学担体として極めて有用であることも話された。



講演される土井教授：平成21年11月26日(木)、千葉校舎第1教室

リン酸カルシウム塩の一般的な性質から、焼結CAの臨床応用まで大変内容の濃い有意義なセミナーであった。

市病フォーラム2009開催

平成21年11月28日(土)午後2時より、市川総合病院講堂に於いて、市病フォーラム2009が開催された。

今回は「がん診療連携拠点病院と市川総合病院の取り組み」と題して行われた。安藤暢敏市川総合病院長の挨拶にはじまり、実行委員長の松井淳一教授(外科学講座)[広報委員長]の司会進行のもと、がん診療連携拠点病院としての当院の取り組みについて、各分野から幅広い講演が行われた。

プログラムは2部構成で行われた。第1部は「がん診療連携拠点病院と5大がん」として、松井実行委員長による全般的な講演に始まり、各診療科の医師よりそれぞれのがん治療と現状について、様々な角度から講演が行われた。

第2部は「地域、在宅、そしてチーム医療との連携を目指した市川総合病院のがん医療」として

訃報 黒柳錦也名誉教授ご逝去



本学名誉教授黒柳錦也先生は、平成21年10月24日にご療養中のところ薬石功を奏さず長逝されました。享年73歳。黒柳

先生は、昭和11年3月3日東京都にお生まれになり、同36年3月東京歯科大学を卒業され、同36年4月に同大学大学院歯学研究科に入学、同40年3月同研究科を修了、同時に歯学博士の学位記を受領されました。昭和40年4月に東京歯科大学助手(口腔外科学)として勤務、同年10月に同大学講師(口腔外科学)、同49年4月に同大学助教授(歯科放射線学)、同52年10月に同大学教授(歯科放射線学講座主任教授)に就任されました。その後、平成7年6月から東京歯科大学図書館長、同10年6月から東京歯科大学歯科衛生士専門学校長を務められ、同13年3月定年退職され、同年4月に東京歯科大学名誉教

授の称号を授与されました。歯科放射線学の教育、研究、診療活動に専心されたことは申し上げるまでもなく、日本歯科放射線学会をはじめ多くの学会でご活躍されました。黒柳先生の御業績は、周知のごとく枚挙に暇がありません。その中でも特筆すべきは、黒柳先生は今ほど目を向けられていませんでしたEBMに固執された研究を遂行され、現在の歯科画像診断の礎を作られました。パノラマX線撮影の障害陰影についての先生の研究成果なくしては、日常的に行われている質の高いパノラマ画像診断はありえませんでした。また、歯科用デジタルX線画像診断システムについての研究は、適切な運用についての根拠を示すことで、国内での導入と適切な運用を確立することに多大な御貢献をされました。常に尊敬される存在であられた先生が逝去されたことは、耐えがたい痛みです。心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。(佐野司)

行われた。土橋正彦市川市医師会長を講師にお招きし、市川市におけるがん診療や、地域連携クリティカルパスなど大変興味深い講演が行われた。引き続き、当院の放射線科、薬局、看護部、医療情報システム管理課、地域連携・医療福祉室等、様々な職種から、現状、今度の在り方や方向性についての講演が行われた。最後に、緩和ケア委員長である小坂橋俊哉教授より緩和ケアについての概要について講演が行われた。

70名を超える参加者からは、大いに関心が寄せられ、質疑応答も活発に行われ、大変有意義なものとなった。

最後に、安藤市川総合病院長から挨拶をいた

だいて、閉会となった。



市病フォーラム2009風景：平成21年11月28日（土）市川総合病院講堂

平成21年11月24日

教職員への移転関係報告（4）

理事長 熱田 俊之助
学長 金子 謙

教職員 各位

大学の水道橋移転計画については、これまで大学広報、ポータルサイト、並びに同窓会会報等においてご案内をしてきました。

本年5月開催の講座主任教授会、理事会及び評議員会において建設フレームを決定し、それに基づき取りまとめた基本計画については、11月17日開催の第562回講座主任教授会、同19日開催の第659回理事会にて承認を受けました。今後は基本設計の段階に移行することとなります。

今般、講座主任教授会において提示されました要望等とその回答について、教職員各位へお知らせいたします。

今後もお知らせについては大学広報及びポータルサイトを通じて随時行いたいと考えております。教職員各位におかれましては、本計画へのご理解・ご協力をお願いいたします。

基本計画への要望等と回答

TDC本館

	部門	要望等	回答
TDC本館	テナント	TDCビル全てのフロア使用はできないか	「TDCビルの3フロアをテナントに賃貸する」という方針は、移転の1次計画における方針です。立退料等、巨額の費用発生を避けるため、確保の目処が立ったフロアのみで1次計画とし、残りのフロアについてはテナントの動向、収益事業の大学事業への貢献度等を総合的に勘案した上で、随時将来計画に組み込む見込みです。
	セキュリティ	セキュリティ	各部門の出入口にカードキー（IC）による入退出管理を行う計画としています。
	病院内食堂	食堂設置	現状、水道橋病院の職員からは、院内食堂の設置が緊急性・重要性の高い要望としては上がってきていないこともあり、現時点では、立地を最大限有効活用し、飲食機能については水道橋という街に委託するという想定です。
	消毒・滅菌室	消毒・滅菌	消毒、滅菌については現在の千葉病院と水道橋病院で体制が異なることを含め、大きな課題です。病院の体制自体の再検討が必要になると思われます。建物の制約等の抜本的な解決は、2次計画以降になります。
	臨床の各診療室	チェア数の不足	患者視点で見た場合、大学が水道橋に移転することによって水道橋病院の患者数が歯科医師数及びチェア数の増加に比例して急激に倍増するとは必ずしも言えません。千葉病院をそのまま水道橋に再現することが移転の目的ではない以上、新しい水道橋病院の規模は現在の千葉病院の規模だけでなく、立地、患者状況、財務状況等も含めて総合的に検討されるべきであり、それらの諸条件を踏まえた診療体制、臨床教育カリキュラムの再構築が必要になると考えています。
6階	内科・臨床検査部門の配置	内科、臨床検査部門の配置については必ずしも好ましい配置ではないことは承知していますが、場合によっては2次計画での抜本的な解決を目指すこともあり得ます。医療法等の法令遵守については日本設計を通じて対応するようにいたします。	

TDC本館			
部門	要望等	回答	
TDC本館	実験室	各講座の実験室	今後の大学としての研究は口腔科学研究センターを中心に推進することが大学としての方針であり、その方針に従って既に組織整備も進めてきたところではありますが、これは講座における研究を否定する主旨ではありません。重点はあくまで口腔科学研究センターに置く、ということは既にご理解頂いていることと思っております。その上で講座内研究との関係をもとに位置付けるか、口腔科学研究センターを中心に議論を進めることとなります。建物的な制約があることについては貴見の通りですが、その上でどのような手法が可能であるか、各講座においても是非ご検討頂きたいと思っております。なお、口腔科学研究センターについては現在の基本計画案でTDCビルの1フロアを想定していますが、これが完成形と限定しているものではなく、必要に応じて2次計画、あるいは将来的な整備を行うこともあるものと考えています。
	口腔科学研究センター	冷凍庫の配置、水回りの計画等	基本設計での検討において、参考にします。
1号館			
部門	要望等	回答	
1号館	交流ラウンジ等	交流ラウンジ、セミナー室、ロッカー、トイレ等の充実	現在同等の機能を有する教養棟のラウンジ、トイレと比較しても、遜色ないものであると考えています。土地の広さから建物の総床面積が規定されるため、どうしても確保しなければならない教室等の施設を優先して配置しています。セミナー室については図書室内の配置を検討しています。
	エレベーター階段	エレベーターの増設、階段の拡幅	建築基準法に基づく基本プランは非常用エレベーター1基、階段2カ所が必須ですが、条件によってはエレベーター2基+階段1カ所+避難バルコニーとしても法的にはクリアできます。日常の動線としてエレベーターを2基とし、緊急時対策として階段の幅員を基準法以上の寸法とすることで安全性を確保する計画を現在検討中です。詳細は基本設計にて検討します。
	実習室	実習室、教員室の配置	建築的には対応可能であり、貴見の通りとなるよう検討いたします。
	学生会室	クラブ活動のための居室	クラブ活動については、本学所有の岡武ビル等の活用も考えています。
2号館			
部門	要望等	回答	
2号館	学生食堂	学生食堂の設置	現時点では、立地を最大限有効活用し、飲食機能については水道橋という街に委託するという想定です。
	セキュリティ	セキュリティ	セキュリティについてはIT部会を中心として、千葉校舎から考え方を一新したシステム(IC活用など)を構築する方向で検討を進めています。
	実験動物施設	実験動物施設の配置	動物実験に関連する共用実験施設等については基本設計にて検討を行います。
	設備	トイレ、ロッカー室の充実	基本設計にて詳細に検討を行います。
	臨床基礎実習室	臨床基礎実習室と作業室の同一フロア配置、出入口の狭さ	臨床基礎実習室を現在の半分の人数で使用する等、条件が変われば実現可能です。あくまで現在同様、学年全員が臨床基礎実習を同時に受ける、という前提で策定しておりますが、運用と合わせて変更することは可能です。出入口については、基本設計にて詳細に検討を行います。
	形態	形態が効率よりもデザイン重視	2号館の形態は、斜線制限等の法的な規制の中で最も効率的であると思われるものを日本設計が提案したもので、デザイン性を追求した結果の形態ではありませんが、基本設計において、さらに効率的なプランとなるよう検討します。
図書館			
部門	要望等	回答	
図書館	スペース	図書、史料の配置スペースが少ない	現状の1次計画案において、本学が所有する全ての図書・史料の保管スペースが確保できないことについては貴見の通りです。当初は、過去の貸出実績等を分析した運用を行うことになると考えます。収納できない図書、史料は、しばらくは千葉校舎の現図書館スペースにて保管し、そして2次計画以降、将来的には水道橋校舎に移すというのが現在の想定です。
	セキュリティ	セキュリティ	千葉校舎と水道橋校舎では校舎の利用方法を一新することになると考えます。全体的なセキュリティについてはIT部会を中心に検討してもらいますが、図書館部会も運動して、セキュリティあるいは図書システム全体も含めたシステムの構築を検討して頂きたいと思っております。
総合			
部門	要望等	回答	
総合	狭くなること	現状から狭くなること	将来構想は高機能化、低経費化をコンセプトとしており、スペースの効率化は当初からの大きな目的の一つです。また、千葉校舎と同規模のスペースを水道橋に確保することは現実的ではありません。移転すること自体は法人としての機関決定ですので、その方針に従って実際の教育研究活動が断絶しないよう方策を考えるのが、教授会を始めとした我々大学教員の使命であると考えています。
	運動施設	グラウンドの使用、体育館の整備等	当面の間は稲毛を活用する想定ですが、市川総合病院の近くにある旧市川病院の跡地を確保しており、将来的には体育施設の整備も検討いたします。参考までに、本年4月に水道橋校舎を開校した日本大学法学部は、体育の授業のみを大宮で行っているとのことでした。
	千葉病院	移転後における千葉病院のあり方	東京歯科大学は、3つのそれぞれ特色を持った附属病院を有することをアピールポイントとしていますが、これは大学が水道橋に移転した後でも全く変わらないことです。引き続き千葉病院は地域に根ざした医療機関として機能することが期待されており、大学の附属病院である以上、教育面で必要とされる役割を担うこととなります。

以上の他、頂いた様々なご意見、ご要望につきましては、基本設計の段階で参考とさせていただきます。詳細に検討したいと思っております。

長期海外出張者報告

薬理学講座 助教 四宮 敬史

私は大学の御厚意により平成20年9月26日から平成21年9月25日までの1年間、米国国立衛生研究所(National Institutes of Health; NIH)へ長期海外出張させていただきました。

米国国立衛生研究所は、米国保健福祉省(Department of Health and Human Services; DHHS)の11ある部署のひとつで、メインキャンパスはワシントンDC近郊のメリーランド州ベセスダにあり、27の研究所とセンターから構成され、1万8,000人のスタッフを抱える世界最大級の研究拠点です。

私が所属していたのはメインビルであるビル10の1階にある米国国立歯科・頭蓋顔面研究所(National Institute of Dental and Craniofacial Research; NIDCR)分子生理学治療部門(Molecular Physiology and Therapeutics Branch; MPTB)の遺伝子導入研究室(Gene Transfer Section; GTS)で、主任は本学の客員教授でもあるDr. Bruce J Baumです。私はPostdoctoral Fellowship Programにより、1年間Visiting Fellowとして研究を遂行しました。

Dr. Baumの研究室では、水分分泌タンパクであるアクアポリンを用いた遺伝子導入を主な研究テーマとしていて、実際にシェーグレン症候群

患者の遺伝子治療を行っております。シェーグレン症候群の原因としては加齢や放射線照射が挙げられますが、治療法としては催唾剤や人工唾液といった対症療法が主で根本的な治療は無かったので、将来性の有る非常に画期的な治療法だと考えます。

私の研究テーマは、「耳下腺に対する遺伝子導入による合成タンパク質の仮想的分泌経路の分子生物学的解析に関する研究」で、内容としてはルシフェラーゼが組み込まれたアデノウイルスをカニューレーションによりマウス耳下腺に遺伝子導入し、全身分布を調べました。これまで、唾液腺への遺伝子導入では主に顎下腺が用いられてきました。このたびの研究では、耳下腺への遺伝子導入によりアデノウイルスが全身へは分布せず、耳下腺だけに限局して分布することがわかりました。このことから、耳下腺への遺伝子導入が安全であることが証明されました。またエリスロポエチン遺伝子を耳下腺に導入することによる全身への影響を調べました。

私はこの一年間、視点を変えた考え方の研究や新しい実験技術の修得、様々な国籍の人々との交流など、研究者としてまた人間として国内だけでは成し得ない貴重な研鑽を積めたと考えております。このたびの長期海外出張の機会を与えて下さいました関係者の方々へ感謝致しますとともに、この出張を通じて得た技術を生かし本学に貢献したいと考えております。



四宮助教(右)とDr. Baum(左)：平成21年9月22日(火) 米国国立衛生研究所ビル10

学生会ニュース

第5学年 高本愛子さん スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラムで準優勝

平成21年8月26日(水)に第15回スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム(SCRIP)日本代表選抜大会が、日本歯科医師会主催/デンツプライ三金株式会社後援により日本歯科医師会館で行われ、本学から出場した第5学年の高本愛子さんが見事準優勝を受賞した。

SCRIPは国際的に歯科界の発展を担う研究者・教育者・開業医の輩出を目的として、世界35カ国において実施されている歯科学士の英語による研究の実践発表コンペである。

今年は22校から参加があり、臨床応用できる新しい材料や検査システムを提案したもの、食品が口腔内環境に及ぼす影響を研究したもの、学生の観点で実習のシミュレーションや卒前教育について検討したものなど発表内容は多岐に及んだ。

高本さんは美容分野で肌の色の診断などに用いられている「分光測色計」を用いて口腔粘膜の色

を計測し、数値化して口腔粘膜疾患の診断補助ができないか、ということテーマに口腔健康臨床科学講座 片倉 朗准教授指導のもとに行ってきた研究を、「Development of Shade Guide for Clinical Diagnosis of Oral Mucosal Disease; an Application of a Skin Color Analyzing System at Cosmetic Counters」(コスメティックアドバイスにおける肌の色診断システムの口腔粘膜疾患診断への応用)と題して発表を行った。この発表で「分光測色計」



準優勝を果たした高本さん(左)と片倉准教授(右)：平成21年8月26日(水) 新歯科医師会館

を用いて白板症の粘膜の色を計測したところ、健全粘膜と病変との色の差が数値化して記録できることが示され、将来的にチェアサイドで簡単に口腔粘膜疾患を診断できる方法として応用できる可能性を示唆した。

審査は審査員に対して3回、英語でポスタープレゼンテーションを行い、さらに英語で質疑応答を行う。審査の結果、「一般の歯科医師にとっ

て診断の難しい口腔粘膜疾患に注目し、簡単に診断できる方法を考案した」という着眼点と審査員からの質疑に対して英語で適切な回答を行った点が評価され受賞に至った。

来年度も正課の授業以外の時間で行った研究成果を自主的にSCRIPで発表し、本学からの出場した学生が優秀な成果を修めてくれることを期待する。

図書館から

本学教員著書リスト

(本学の教員名が標題紙に記載されているものに限定)

武井泉、金井千晴 編「糖尿病合併症ケアガイド」学研、2009

坂本輝雄 [ほか] 編「矯正治療中のカリエス・ペリオコントロール」医学情報社、2009

下野正基 監修「歯周病予防と口腔ケア」小学館、2009

井出吉信 [ほか] 編「口腔解剖学」医歯薬出版、2009

本学教員の著書については、特に収集に努めております。著書発刊のおりには、できましたらご寄贈のほどよろしくお願いいたします。

DRF - Med地域ワークショップ(東京)共催

平成21年10月3日(土) 東京慈恵会医科大学においてDRF(デジタルリポジトリ連合)の主催による「リポジトリは医療に何ができるか」と題したワークショップが開催され、東京歯科大学図書館も共催した。リポジトリ事例報告のひとつとして東京歯科大学学術機関リポジトリの構築、運営等について阿部潤也閲覧係長が事例発表をした。

パネルディスカッションでは4名の話者提供者の一人として、研究者の立場から、口腔科学研究センターの新谷益朗准教授より、リポジトリでオープンアクセスになった時のコンテンツの質についての提起がなされ、著者、編集者、査読者にはユーザーの評価を意識したコンテンツ作りが必要という、興味深い講演をされた。話者提供にはそれぞれの立場からリポジトリへの期待、課題等があった。参加者の所属は大学図書館のみならず、

病院図書関係者など様々で、当日は50名近くの参加があった。

今回のワークショップでは、色々な立場のリポジトリに関心をもつ方々が医療情報のオープンアクセス化という視点で一堂に会し、医療系のリポジトリの課題を共有するという目的を達成でき、好評のうちに終えることができた。



パネリストの新谷准教授とワークショップ風景：平成21年10月3日(土) 東京慈恵会医科大学

阿部潤也閲覧係長丸善研修会で講演

平成21年10月24日(土) 東京・日本橋の丸善本社にて開催された、丸善株式会社主催「大学図



研修会で講演する阿部潤也閲覧係長：平成21年10月24日(土) 丸善本社

書館勤務スタッフ向け図書館情報【応用】研修」に阿部潤也閲覧係長が講師として招かれ「機関リポジトリを知る」と題する講演を行った。機関リポジトリの概要、および国内外の機関リポジトリの状況、著作権やコンテンツ収集の課題を説明するとともに、東京歯科大学学術機関リポジトリの紹介をした。

電子ジャーナル講習会を開催

平成21年11月5日(木)・6日(金)の2日間、午後6時より図書館2階視聴覚室において、電子ジャーナル講習会を開催した。電子ジャーナルの基本的な知識や注意点などについて説明があった後、本学で閲覧可能な電子ジャーナルやPubMed、医中誌を実際に使用して、効率的な文献の入手方法について実習形式で行われた。2日間で15名の

参加があった。アンケートの結果では、参加者全員に満足、または非常に満足と回答をいただき、好評のうちに終了した。今後もこのような講習会を企画し、多くの方に参加していただきたいと考えている。



パソコンで実際に電子ジャーナルを検索する受講生：平成21年11月6日(金) 図書館視聴覚室

大学史料室から

東歯祭の期間中、大学史料室を一般公開

東歯祭が行われた10月31日(土)・11月1日(日)の2日間、例年どおり図書館1階にある大学史料室を一般公開した。今年はロビーに「東歯発祥の地伊皿子」・「東歯建学の地水道橋」と題し、かつての伊皿子町及び水道橋周辺の今昔を写真で紹介し、来場者の興味を惹いた。期間中の来場者数は昨年を上まわり約350名で、盛況であった。



伊皿子町及び水道橋周辺の写真の展示風景：図書館一階ロビー

写真の寄贈を受ける

平成21年11月、東京都武蔵野市在住の大村佐知子様(第一学年大村雄介君のご父兄)からご尊父谷地佐吉先生(東京歯科医学校、大正4年卒)が所有されていた写真をご寄贈いただいた。大正15年4月如水会茨城県支部総会及び、昭和8年

8月茨城県歯科医師会総会での血脇守之助先生を囲む集合写真など5点で、当時の大変貴重な史料であり、大切に保存し後世に伝えたい。



大村様より寄贈された大正15年4月如水会茨城県支部総会の集合写真

史料室収蔵品紹介：雑誌

昭和12年発行の雑誌「婦人の友」31巻9号には血脇守之助先生が書かれた野口英世の伝記「子供のための新偉人伝9 野口英世」が掲載されている。



雑誌「婦人の友」31巻9号表紙



野口英世の伝記記事

歯科衛生士専門学校ニュース

歯科衛生士専門学校登院式挙行

東京歯科大学歯科衛生士専門学校第60期生の登院式が、平成21年10月1日(木)午前11時から千葉校舎講堂において、石井拓男千葉病院長、高野伸夫歯科衛生士部長、尾谷始子歯科衛生士長の臨席のもと、第1学年と第3学年の学生全員が列席する中で挙行された。

橋本貞充学生部長の司会のもと、眞木吉信副校長の呼名により、60期の登院生一人ひとりが紹介された。はじめに下野正基校長より臨床実習に臨む心構えについて訓辞を受けた後、来賓として臨席された石井千葉病院長からの訓辞があった。その後、登院生45名を代表して酒井美佳さんが誓詞を述べ、登院生全員がこれに唱和して式を終了した。



東京歯科大学歯科衛生士専門学校第60期生登院式：平成21年10月1日(木)、千葉校舎講堂

平成22年度推薦入学選考

東京歯科大学歯科衛生士専門学校の平成22年度推薦入学選考が、平成21年10月29日(木)に千葉校舎において実施された。募集人員40名の過半数を推薦入学により入学させるものであり、本年は県内から47名、他県から4名の計51名が高等学校長の推薦により、また、昨年度から始まった社会人特別選抜には、県内から8名、他県から1名の計9名の合計60名が受験した。選考内容は、高等学校長推薦は書類審査と基礎学力検査および面接、社会人特別選抜は自己推薦書および書類による審査と、小論文および面接であった。入学選考は、午前9時30分から始まり、午後3時にはすべてが終了した。

合格の発表については、翌10月30日(金)に開かれた選考委員会で決定され、同日付けで出身高等学校長および受験生本人に通知された。

受験者数の推移については、近年、緩やかな減少傾向にあったが、本年度は、昨年度の実績(高等学校長推薦41名、社会人特別選抜4名の合計45名)と比較しても、15名もの増加があった。これは、本年度より開始した、県内の高校からの指定校推薦を実施や、積極的な学校訪問と学校説明会の前倒しの開催などの効果が出ているように思われるが、歯科衛生士教育の三年制への完全移行となったことや、昨今の厳しい経済状況とそれともなう就職難という社会状況が、大きく影響していると考えられた。

人物往来

国内見学者来校

千葉校舎・千葉病院

さいたま赤十字看護専門学校(学生43名、教員2名)

平成21年10月9日(金)解剖標本室、病院見学
自衛隊中央病院高等看護学院(学生62名、教員3名)

平成21年10月29日(木)解剖学講義、解剖標本室見学

三河歯科衛生専門学校(学生40名、教員3名)

平成21年10月30日(金)解剖標本室見学

関東鍼灸専門学校(学生44名、教員4名)

平成21年11月5日(木)解剖実習室、解剖標本室見学

横浜市立盲特別支援学校(学生24名、教員9名)

平成21年11月26日(木)解剖実習、解剖標本室見学

海外出張

石崎 憲講師(有床義歯補綴)

顎顔面補綴に関する知識と臨床技術の習得、および再生医療の研究を行うため、平成21年10月1日(木)からアメリカ・ロサンゼルスへ出張。帰国は平成22年9月30日の予定。

衣松高志助教(歯周病)

顎関節の成長と形態形成におけるインディアンヘッジホッグシグナリング、および異所性骨形成のメカニズムについての研究を行うため、平成21年10月1日(木)からアメリカ・フィラデルフィアへ出張。帰国は平成22年9月30日の予定。

外木守雄准教授(市病・オーラルメディスン・口腔外科)

Comprehensive Management in Pediatric Obstructive Sleep Apnea and Micrognathia-Symposium and Live Surgeryに参加のため、平成21年10月2日(金)から7日(水)まで、インドネシア・ジャカルタへ出張。

篠崎尚史講師・センター長(角膜センター)

ヨーロッパ移植コーディネーター協議会定例会議に出席のため、およびWHO本部局長と面談

のため、平成21年10月2日(金)から10日(土)まで、ドイツ・ベルリン、およびスイス・ジュネーブへ出張。

阿部伸一准教授(解剖)

台北医学大学歯学部5年生にインプラント学の講義を行うため、またChi-Mei病院(大学関連病院)にて医局員および研修医に安全にインプラントを行うための手術の注意点に関する講演を行うため、平成21年10月4日(日)から7日(水)まで、台湾・台北へ出張。

亀山敦史講師(干病・総合診療科)

Catholic University of Leuven歯科保存学教室と共同研究の打合せのため、平成21年10月8日(木)から13日(火)まで、ベルギー・ルーベンへ出張。

薬師寺 仁教授(小児歯科)

中華口腔医学会児童口腔科学分科会生涯研修講演のため、平成21年10月11日(日)から15日(木)まで、中国・西安へ出張。

金子 讓学長(大学)

第12回国際歯科麻酔学連合の理事会・評議員会に出席のため、および座長として参加するため、平成21年10月12日(月)から18日(日)まで、オーストラリア・ゴールドコーストへ出張。

一戸達也教授、寺川由比大学院生、小鹿恭太郎大学院生、後藤隆志大学院生(歯科麻酔)

第12回国際歯科麻酔学会に参加、および発表のため、一戸教授は平成21年10月13日(火)から16日(金)まで、寺川大学院生は10月13日(火)から18日(日)まで、小鹿大学院生、後藤大学院生は10月12日(月)から18日(日)まで、オーストラリア・ゴールドコーストへ出張。

半田俊之助教(水病・歯科麻酔)

第12回国際歯科麻酔学会で発表のため、平成21年10月13日(火)から18日(日)まで、オーストラリア・ゴールドコーストへ出張。

櫻井 学講師、湯村潤子助教(歯科麻酔)

The 2009 Annual Meeting of American Society of Anesthesiologistsに参加、および発表のため、櫻井講師は平成21年10月15日(木)から21日(水)まで、湯村助教は10月17日(土)から22日(木)

まで、アメリカ・ニューオーリンズへ出張。
ピッセン弘子教授(水病・眼科)
ビデオ白内障屈折手術学会2009で講演、および発表のため、平成21年10月15日(木)から19日(月)まで、イタリア・ミラノへ出張。
小坂橋俊哉教授、縣 秀栄講師、加藤崇央助教(市病・麻酔科)
The 2009 Annual Meeting of American Society of Anesthesiologistsに参加、および発表のため、平成21年10月17日(土)から22日(木)まで、アメリカ・ニューオーリンズへ出張。
津坂憲政准教授(市病・内科)
アメリカリウマチ学会に参加、および発表のため、平成21年10月17日(土)から24日(土)まで、アメリカ・フィラデルフィアへ出張。
武井 泉教授(市病・糖尿病・内分泌センター)
国際糖尿病学会で発表、およびアメリカHbA1c委員会代表との打合せのため、平成21年10月18日(日)から25日(日)まで、カナダ・モントリオール、およびアメリカ・ニューヨークへ出張。
篠崎尚史講師・センター長(角膜センター)
アメリカアイバンク協会定例会議に出席のため、平成21年10月20日(火)から25日(日)まで、アメリカ・サンフランシスコへ出張。
石上恵一教授(スポーツ歯科)
Kyung Hee Universityで講義、および大韓スポーツ歯科学会役員とのアジアスポーツ歯科学会設立準備の打合せのため、平成21年10月22日(木)から25日(日)まで、韓国・ソウルへ出張。
矢島安朝教授(口腔インプラント)
Choubuk National University School of Dentistry30周年記念学術大会で講演のため、平成21年10月22日(木)から25日(日)まで、韓国・全州へ出張。
眞木吉信教授(衛生)
9th Conference of Korean Academy of Clinical Preventive Dentistryに参加、および発表のため、平成21年10月23日(金)から25日(日)まで、韓国・ソウルへ出張。
市川仁志助教(市病・消化器内科)
アメリカ消化器病学会に参加、および発表のため、平成21年10月23日(金)から29日(木)まで、アメリカ・サンディエゴへ出張。

佐竹良之講師、山添克弥レジデント(市病・眼科)
第113回アメリカ眼科学会に参加、および佐竹講師は発表のため、平成21年10月24日(土)から29日(木)まで、アメリカ・サンフランシスコへ出張。
武本真治講師(歯科理工)
Bioceramics22で発表のため、およびWonkwang Universityで研究打ち合わせのため、平成21年10月26日(月)から30日(金)まで、韓国・大邱、益山へ出張。
吉成正雄教授(口腔科学研究センター)
International Conference on Biomedical Engineeringに参加、および発表のため、平成21年10月27日(火)から11月3日(火)まで、イタリア・ヴェニスへ出張。
高木多加志准教授(口腔外科)
The 48th Congress of the Korean Association of Maxillofacial Plastic and Reconstructive Surgeonsで発表のため、平成21年10月29日(木)から11月1日(日)まで、韓国・ソウルへ出張。
松久保 隆教授、杉原直樹講師、大澤博哉大学院生(衛生)
The General Conference of the Korean Academy of Dental Health and the Korean Society of Dental Hygiene Scienceで発表のため、および松久保教授は延世大学にて研究打ち合わせのため、松久保教授は平成21年10月29日(木)から11月3日(火)まで、杉原講師、大澤大学院生は10月30日(金)から11月1日(日)まで、韓国・ソウルへ出張。
一戸達也教授(歯科麻酔)
2009年台湾家庭牙医学会で講演のため、平成21年11月6日(金)から9日(月)まで、台湾・台北へ出張。
山根源之教授(市病・オーラルメディスン・口腔外科)
韓国老年歯科学会(国際部)で講演のため、平成21年11月7日(土)から、8日(日)まで、韓国・ソウルへ出張。
山田 了教授、太田幹夫講師、高橋 賢講師(歯周病)
The 50th Anniversary of Korean Academy of Conservative Dentistry, 2009 Autumn Scientific Meeting the 11th Joint-Scientific Meeting between

KACD & JSCDに参加、および発表のため、平成21年11月12日(木)から15日(日)まで、韓国・濟州島へ出張。

藤波弘州助教(水病・保存)

The 50th anniversary of Korean Academy of Conservative Dentistry, 2009 Autumn Scientific Meeting the 11th Joint-Scientific Meeting between KACD & JSCDに参加、および発表のため、平成21年11月12日(木)から15日(日)まで、韓国・濟州島へ出張。

天谷哲也講師、手銭親良大学院生、間奈津子大学院生(歯科保存)

The 50th anniversary of Korean Academy of Conservative Dentistry, 2009 Autumn Scientific Meeting the 11th Joint-Scientific Meeting between KACD & JSCDに参加、および発表のため、天谷講師は平成21年11月13日(金)から、手銭大学院生、間奈津子大学院生は12日(木)から、それぞれ14日(土)まで、韓国・濟州島へ出張。

ピッセン弘子教授(水病・眼科)

台湾白内障屈折手術学会、および台湾眼科学会で講演のため、平成21年11月13日(金)から15日(日)まで、台湾・台北へ出張。

河野隆志助教(市病・循環器内科)

アメリカ心臓病学会で発表のため、平成21年

11月14日(土)から20日(金)まで、アメリカ・オーランドへ出張。

櫻井薫教授、山田将博助教(有床義歯補綴)

5th Scientific Meeting Asian Academy of Osseointegrationに参加、および発表のため、平成21年11月20日(金)から24日(火)まで、インドネシア・デンパサールへ出張。

高市真之レジデント(市病・オーラルメディスン・口腔外科)

口腔粘膜ステムセル研究について延世大学で打ち合わせのため、平成21年11月20日(金)から23日(月)まで、韓国・ソウルへ出張。

内山健志教授、須賀賢一郎講師、渡邊章助教(口腔外科)、松浦信幸助教(歯科麻酔)

ベトナム社会主義共和国にて、口唇口蓋裂を中心とする口腔先天異常疾患患者への医療援助・技術指導、および学術調査のため、平成21年11月23日(月)から12月5日(土)まで、ベトナム社会主義共和国・ホーチミンへ出張。

篠崎尚史講師・センター長(角膜センター)

European Union Standards and Training in the inspection of tissue establishment、およびWHO コーディング化に向けての会議に出席するため、平成21年11月30日(月)から12月7日(月)まで、ポーランド・ワルシャワへ出張。

大学日誌

平成21年10月

1(木) 大学院入学試験(期)願書受付開始
(~11/27)

1~4年生後期授業開始

歯科衛生士専門学校登院式

省エネルギーの日・防災安全自主点検日

科学研究費申請に関する説明会(血脇記念ホール)(水病)

2(金) 大学院事務連絡会

学生部(課)事務連絡会

歯科衛生士専門学校2年生臨床実習開始

歯科衛生士専門学校1年生後期授業開始

5(月) 内部監査(公的研究費)

平成22年度予算編成打ち合わせ会

プログラム責任者・副責任者会議

5(月) ランチタイムセミナー(~8日)(市病)

6(火) 内部監査(公的研究費)(市病)
栄養委員会(市病)

7(水) リスクマネージメント部会
ICT会議

基礎教授連絡会

千葉校舎課長会

大学院運営委員会

大学院研究科委員会

医療監視(市病)

内部監査(公的研究費)(水病)

口腔健康臨床科学講座会(水病)

8(木) 医療安全管理委員会(市病)

手術室運営委員会(市病)

9(金) ICT委員会(市病)

- | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11(日) 全館停電(水病) | 21(水) ICU運営委員会(市病) |
| 12(月) 消防設備点検(水病) | 22(木) 業務連絡会
大学院説明会
歯科衛生士専門学校内部監査
管理診療委員会(市病) |
| 13(火) 教務部(課)事務連絡会
臨床教授連絡会
第295回大学院セミナー
新電子カルテシステム操作研修開始
(~11/27)
院内褥瘡対策委員会(市病)
内部監査(水病)
給食委員会(水病) | 23(金) 内部監査(市病)
社保委員会(水病) |
| 14(水) 第296回大学院セミナー
看護部運営会議(市病)
救急委員会(市病)
リスクマネージメント部会(水病)
薬事委員会(水病)
医薬品安全管理委員会(水病) | 26(月) 医療連携委員会
第87回歯科医学教育セミナー
医療サービスに関する検討会
電子カルテシステム運用管理委員会(市病)
NST会議(市病) |
| 15(木) 振替授業(月曜日分)
高度・先進医療委員会
環境清掃日・危険物・危険薬品廃棄処理日
部長会(市病)
医療ガス安全管理委員会(市病)
内部監査(学校法人)
保険カルテ指導(水病)
医療安全管理委員会(水病)
感染予防対策委員会(水病)
個人情報保護委員会(水病)
科長会(水病) | 27(火) (財)大学基準協会による大学評価実地
視察
データ管理者会議
カルテ整備委員会
診療記録管理委員会
医療安全講演会(市病) |
| 16(金) 職員研修会
感染予防指導チーム委員会(水病) | 28(水) 看護部運営会議(市病)
病院連絡協議会(水病)
診療録管理委員会(水病) |
| 17(土) 第288回東歯学会(総会)(~18日)
午後のコンサート(市病) | 29(木) 千葉校舎課長会
第297回大学院セミナー
歯科衛生士専門学校推薦入学選考 |
| 19(月) 病院運営会議
個人情報保護委員会
医療安全管理委員会
感染予防対策委員会(ICC)
教養科目協議会
医局長会
医療安全研修会 | 30(金) 大学院事務連絡会
歯科衛生士専門学校推薦入学選考委員会 |
| 20(火) 内部監査
講座主任教授会
人事委員会
臨床教育委員会
機器等安全自主点検日 | 31(土) 第41回東歯祭(~11/1) |
| 21(水) 業務改善委員会(市病) | 平成21年11月
1(日) 第41回東歯祭
2(月) 推薦入学選考・帰国子女・留学生特別選
抜・学士編入学試験願書受付開始
(~11日)
教務部(課)事務連絡会
プログラム責任者・副責任者会議
省エネルギーの日・防災安全自主点検日
薬事委員会(市病) |
| | 4(水) リスクマネージメント部会
ICT会議
基礎教授連絡会
大学院運営委員会
大学院研究科委員会
第298回大学院セミナー |

- | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>4(水) 口腔健康臨床科学講座会(水病)
大学移転説明会(水病)</p> <p>5(木) 学生インフルエンザ予防接種(1~6年生)
電子ジャーナル講習会(~6日)
院内感染症予防対策委員会(市病)</p> <p>6(金) 競争的資金不正防止推進室打合せ</p> <p>9(月) 病院運営会議
個人情報保護委員会
医療安全管理委員会
感染予防対策委員会(ICC)
医局長会
臨床教育委員会
第299回大学院セミナー
公認会計士監査(~13日)(市病)
インフルエンザワクチン予防接種(~13日)(水病)</p> <p>10(火) 学生インフルエンザ予防接種(1~6年生)
歯科衛生士専門学校臨床実習委員会
看護部運営会議(市病)
院内褥瘡対策委員会(市病)</p> <p>11(水) 推薦入学選考・帰国子女・留学生特別選抜・学士編入学試験願書受付締切
千葉校舎課長会
学生部(課)事務連絡会
業務改善委員会(市病)
救急委員会(市病)
ICU運営委員会(市病)
東京都エイズ診療従事者研修派遣事業研修(第1日目)(水病)
リスクマネジメント部会(水病)
薬事委員会(水病)</p> <p>12(木) 業務連絡会
医療安全研修会
医療安全管理委員会(市病)
手術室運営委員会(市病)
治験審査・院内倫理委員会(市病)
緩和ケア講演会(市病)
東京都エイズ診療従事者研修派遣事業研修(第2日目)(水病)</p> <p>13(金) ICT委員会(市病)
感染予防指導チーム委員会(水病)</p> <p>14(土) 推薦入学選考・帰国子女・留学生特別選抜・学士編入学試験(於:水道橋校舎)</p> | <p>15(日) 歯科衛生士専門学校3年生修学旅行(~16日)</p> <p>16(月) 公認会計士監査(大学・千葉病院・歯科衛生士専門学校)(~20日)
第88回歯科医学教育セミナー
環境清掃日
危険物・危険薬品廃棄処理日
ICTランチタイムセミナー(~19日)</p> <p>17(火) 臨床教授連絡会
講座主任教授会(推薦入学・帰国子女・留学生特別選抜・学士編入学判定を含む)
人事委員会</p> <p>18(水) 第300回大学院セミナー
市病フォーラム実行委員会(市病)</p> <p>19(木) 高度・先進医療委員会
大学院説明会
部長会(市病)
理事会(法人)</p> <p>20(金) 機器等安全自主点検日
医療安全管理委員会(水病)
感染予防対策委員会(水病)
個人情報保護委員会(水病)
科長会(水病)</p> <p>21(土) 修学指導関係者・父兄会個別面談会(1~5年生)
市川市との合同災害訓練(市病)</p> <p>24(火) 薬事委員会
データ管理者会議
カルテ整備委員会
診療記録管理委員会
公認会計士監査(法人事務局)(~27日)
教職員研修会(水病)</p> <p>25(水) 振替授業(月曜日分)
看護部運営会議(市病)
管理診療委員会(市病)
病院連絡協議会(水病)
診療録管理委員会(水病)</p> <p>26(木) 6年生第3回総合学力試験(~27日)
千葉校舎課長会
第301回大学院セミナー</p> <p>27(金) 大学院入学試験(期)願書受付締切
医療連携協議会
社保委員会(水病)</p> <p>28(土) 市病フォーラム2009(市病)</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

28(土) 電子カルテシステム操作研修終了日(市病)

30(月) 電子カルテシステム運用管理委員会(市病)

30(月) 教養科目協議会

NST会議(市病)

規程

東京歯科大学における教育職員の任期に関する規程の一部改正

新旧対照表

平成21年11月19日

第659回理事会

現 行	改 正
<p>第1条 (省略)</p> <p>(任期を定める組織及び職等)</p> <p>第2条 (省略)</p> <p>2 (省略)</p> <p>3 (省略)</p> <p>4 本法人「育児休業規程」に基づく育児休業期間については、育児休業を開始した日の属する月から終了した日の属する月までの期間を、任期に含めないものとする。</p> <p>第3条 (省略)</p> <p>第6条</p>	<p>第1条 (省略)</p> <p>(任期を定める組織及び職等)</p> <p>第2条 (省略)</p> <p>2 (省略)</p> <p>3 (省略)</p> <p>4 「産前産後の休暇」、「育児休業」、「介護休業」及び「業務上及び通勤途上の傷病による休職」で、当該期間が継続して3ヵ月以上の場合は、その期間を任期に含めないものとする。</p> <p>5 「欠勤」、「休職」及び「出張」で、当該期間が継続して3ヵ月以上の場合は、人事委員会に付議しその期間を任期に含めないものとするができる。</p> <p>6 前第4項、第5項の適用を受けようとする者は、本人より申請の手続きを行うものとする。</p> <p>7 任期に含めない期間の計算方法は、それぞれの開始した日の属する月から終了した日の属する月までの月数によるものとする。</p> <p>第3条 (省略)</p> <p>第6条</p> <p>次の附則を追加する。</p> <p>附 則</p> <p>1 この規程は、平成21年9月15日から施行する。</p> <p>2 この規程は、施行日を含む任用期間から適用する。</p>

東京歯科大学広報 編集委員

内山健志（委員長）

井上直記 江波戸達也 王子田 啓 狩野龍二 金安純一 河田英司 坂本智子 椎名 裕 柴家嘉明
新谷益朗 田口達夫 日塔慶吉 野島靖彦 橋本貞充 前田健一郎 米津博文（平成21年11月現在）

編集後記

今号は、両国国技館を選んでみました。両国には大鉄傘の通称で知られた旧両国国技館がありましたので、それに対して新国技館とも呼ばれており、昭和60年より使用されております。栃若の名で大相撲の人気を二分し、一世を風靡した協会トップの春日野と二子山の両親方が努力され、無借金で建てたと聞いております。なんとすごい話です。旧国技館は、東京駅を設計した明治の名建築家である辰野金吾が最初に設計しました。関東大震災、東京大空襲などによる損傷のあとの改修を経て、戦後、回向院の蔵前国技館が建築されるまで使われました。その後、日本大学に譲渡され、日大講堂として使われておりましたので、全容をご存知の方もいるかと思えます。国技館の正式名称は「國技館」であり、日本相撲協会の興行のための施設です。

大相撲は日本古来の奉納相撲を起源とすると言われており、歴史は古代に遡ります。相撲が組織だって興行されたのは、江戸時代の初め頃で、深川富岡八幡宮境内で最初に行なわれました。興行といっても寺社の寄付を募るための勧進相撲から始まりました。勝負事の娯楽性と決まり手の競技性、さらに看板力士として轟く大衆性が加わり人気が続く、江戸だけでなく、上方にも広まっていきました。寛政年間には有名な谷風、小野川、雷電などの名力士が輩出し、將軍家斉を迎えての上覧相撲もありました。

明治時代には、4年の断髪令、裸体禁止令によって存続の危機となります。しかし、明治天皇が相撲をとるのが好きだったこと、さらに蹲踞（そんきょ）拍手（かしわで）四股（しこ）をはじめ、相撲が五穀豊穡を願う神事の側面を持つことなどが影響し、その危機を免れたものと思われまます。

江戸時代の鬻をつけたままの相撲がよくぞ今日まで続いてきたことに驚きを感じます。新国技館での記録である7連続優勝をかざった千代の富士 貢は「勝ったときの嬉しさをぐっとこらえて、敗者を慮ることが相撲の美しさだ」といっています。これぞ日本の美意識の一つであるでしょう。

（広報編集委員長：内山健志）



両国国技館